

社會主義學生同盟政治機關紙

赤光

1965年12月7日 No. 20

★ 反帝社会主義！

★ 先進的学友は社会主義学生同盟に結集せよ！

目 次

● 日韓批准阻止斗争の総括

● 現在の情勢

● 任 務 方 針

＝ 社会主義学生同盟全国委員会書記局 ＝

◎ 増・発行 社会主義学生同盟全国委員会

連絡先 東京都千代田区神田駿河台3の2

東京ビル内 先驅社

電 (251) 7213

¥ 30

日本帝国主義の戦略的環 || プレファシズムを明確にせよ！

同盟を革命的理論で武装し鍛えあげよ！

☆ 日韓斗争の中間総括

|| 社会主義学生同盟全国委員会書記局 ||

はじめに。

約三ヶ月間にわたる階級斗争の激動は、十
月段階より本格的な政治的攻防戦を展開しな
がら十一月初旬の最終決戦期を迎え、ブルジ
ヨアジーの圧制的な支配装置の全面化と集中
化を結集し、この突攻体制の創出の前に、唯
一の斗争の最前線を引き受け突出した前衛的
部隊の解体を過して、流動し拡大しつつあつ
た全戦線は、その有機的全体性「ダイナミズ
ム」を喪失し、無方向のまま拡散し分断され瓦
礫しつつある。

かかる全戦線のしかんと敗退過程の間隙を
進撃しながらブルジョアジーは自らの体制を
整備すると同時に、流動化を通して現出した
諸要素をブルジョア的に一举に集約し、日韓
批准を突破口に新たな攻勢を通じてブレーフア
シズム体制の実現に向いつつある。

だがにも拘らず、かかる進撃から攻勢へと

進出しつつある攻撃は、流動化から無方向の
まま放置され膠着しつつある巨大なエネルギー
を再び活性化させ、新たな矛盾を生み落し

年末斗争から春斗を機軸に受け継がれ一層の
激動を全面化させる展望を極めて鋭く内包さ
せつつある。

このような局面に於て、荒々しい激斗の
二ヶ月間に渡つた過程で、我々が遂着し、体
験した全ゆる問題を普遍化し、我々が蓄積し
継承してきた思想的・政治的・組織的な内実
をより豊富化し、深め、我々の立脚すべき立
場の核を一層鮮明化させる作業は盛めて重要
であることは言うまでもない。

このことは三重の意味に於て極めて重要で
あることが確認されねばならない。

総括するに當つてふまえてられねばならぬ

三つの問題とは。

第一に総括とは生きる現実と自己との普
段の対象化過程であるし、同時にそのことは、

組織を支える理論の絶えざる検証過程である

こと、換言すれば自己否定を通じての新たな
政治的・理論的・思想的内容への止揚である。

その裏返しとしての技術主義的実力斗争で
あつた。それは一口で言えば社民思想の敗北

であるが、それが現実と自己との普

段の対象化過程であるし、同時にそのことは、

組織を支える理論の

進行せしめ上であつた。

我々は社青同の諸君に少なくとも以下の点だけは総括してもらわねばならぬ。

①一〇・五の約六〇〇名余の大衆斗争に

成功しながらも一〇・二九ではストに失敗し大衆動員を早大で獲ちとられなかつたこと。

②宣伝煽動が最終的にトマトウのバクロを軸とした一般的戦争反対に終始せざるを得なかつたこと。

③反戦育委への解放派の介入と左傾化による社青同解放の一挙的拡大に対しても、社民の反動化と官僚統制による挫折に対する抗議成論を含めた組織論的総括。

④一点突破全面展開から自爆論そして、石を投げても社会門題化にまで至つたところの運動論と日本革命前戦論等との関連

⑤最後に君達の立場であつた階級形成論と解放一号との内的関連は如何になされ

中核派の諸君は「侵略と抑圧のバクロが足らず國際主義の實徵できなかつた」と述べて

いる。では先駆的教条的な國際主義のテーゼではなく実態的に大衆Mの武器となるべき國際主義とは何んであつたのか。

「小ブル急進主義」の否定と大衆Mの第一

議性」と主張し昨年の原潜斗争ではむしろ古

典的先駆性論の歪小化を実践し、それなりに

理論化したにも拘らず、一〇・五の段階では

中核派の諸君は「侵略と抑圧のバクロが足

らず國際主義の實徵できなかつた」と述べて

いる。では先駆的教条的な國際主義のテーゼ

ではなく実態的に大衆Mの武器となるべき國際主義とは何んであつたのか。

「小ブル急進主義」の否定と大衆Mの第一

議性」と主張し昨年の原潜斗争ではむしろ古

典的先駆性論の歪小化を実践し、それなりに

理論化したにも拘らず、一〇・五の段階では

中核派の諸君は「侵略と抑圧のバクロが足

らず國際主義の實徵できなかつた」と述べて

いる。では先駆的教条的な國際主義のテーゼ

ではなく実態的に大衆Mの武器となるべき國際主義とは何んであつたのか。

「小ブル急進主義」の否定と大衆Mの第一

議性」と主張し昨年の原潜斗争ではむしろ古

典的先駆性論の歪小化を実践し、それなりに

理論化したにも拘らず、一〇・五の段階では

中核派の諸君は「侵略と抑圧のバクロが足

らず國際主義の實徵できなかつた」と述べて

いる。では先駆的教条的な國際主義のテーゼ

ではなく実態的に大衆Mの武器となるべき國際主義とは何んであつたのか。

情勢の急迫という理由でむしろ当初の段階とは無關係に国会突入を呼号したシグザグマテイクな対応を如何に総括するのか。

そし

M戦の諸君は全つたく没主體的な中間総括を「社共の新しい日和見主義の型態」に敗北の要因を帰せようとしている。

M戦、旧M派の諸君はこのよきな戯劇的な要因を帰せようとしている。

新左翼諸派の総括や日韓斗争の過程でプラグマティックな対応され、より昂められていく所の革命的理論形成の内的過程が斜しようされる傾向をもつのは何か。

安保斗争以降の敗退過程と分裂状況は思想の無党派化と無原則性を強めると同時に組織を総括を索出するのに努力するより、むしろ自己が主張した階級決戦論が決戦を迎える以前に破綻し、その理論を持たずしてむしろ斗争に参加しなければならなかつたこと、しかも日韓斗争は大衆Mといふ意味を深めることが無関係であつたところの意味を深めることが先決である。

革マル派はそれなりに貫していだし、現在の空洞化状況を認識していながらも、かかる認識が何故に單一化に典型化される如く

大衆的Mとして日韓斗争を斗い切れなかつたか、しかもその敗退の結論を自己の絶対化と

政治的内容を獲得し切れていない事態の根源が黒田哲學から組織論そのものに起因していること、そしてその破綻は近い将来に統一戦線をめぐつて、本格的に社会ファシズム論に自己完結して階級斗争の波から取り残される

か、いかが問われるだろう。

さてここでは他潮流の批判に紙面を費すのが目的ではない。

この過程を通しての組織の分裂と再編は旧理

論体系の精算と新理論の採用と非系統性・非

媒介・は組織の心情と人間関係のみ)の累積。この過程を通じての組織の分裂と再編は旧理

論の為の、他潮流との区別の為の教条とド

グマを構築し、そのことによつて活動家そのものを硬直化させ、更に大衆との接点においては危機感(民主主義防衛意識)のみに取扱

される宣伝煽動と斗争に於ける即時的戦斗性

上昇され、革命的理論の継承と斗争を通じての連続的発展の根底的拠点を希薄化し、「斗争の為の、他潮流との区別の為の教条とド

グマを構築し、そのことによつて活動家そのものを硬直化させ、更に大衆との接点においては危機感(民主主義防衛意識)のみに取扱

される宣伝煽動と斗争に於ける

引させ議会約款派でもって集約するところの
議会制度による支配力の効果性であった。
神格化された国会の権威を潜在的には暴力で
もって防衛する衝動を持ちつつも、労働者階
級の全体のヘグモニーが組合主義的・議会主
義的ヘグモニーであることを全面的に利用す
るところにこそ支配の今日があつた。にも拘
らず戦後民主主義体制そのものの空洞化・公
的生活と実生活の背離と亀裂に對して直接
民主主義を要求し、その急進化の過程で自己
そのものを否定しつつあつたところの戦後學
生大衆とその指導ヘグモニー・旧共産主義
者同盟・全学連盟がかかる支配の歴史的弱点
を衝くことによって國家の幻想を部分的にで
はバクにすることに成功したのであつた。
だが旧共産主義者同盟は労働者階級の進むべき
方向をどの政治へグモニーにも先がけて、
先駆的に表現しつつも、歴史の早産児であつ
た。潛在的には来るべき労働者階級のヘグモ
ニーを崩壊的に鏡内包しつつも、かかる流
動化の過程で現実的な運動の部隊を学生から
労働者階級へと急速に連続的に移行させ、時
点にあつて思想的蓄積・政治的政等それを物
質化させるべき労働者の中の組織的中核を
キにまとめあげ実力ストと「集頭デモンストレ
ーション」を結合させながらブルジョアジーの
暴力に對して武装していく方向を不可能にし
たのであつた。勿論かかる生産点での実力ス

トライキは資本主義の危機の深まりの中では極めて困難な作業であり、本質的には組合主義的経済斗争と社会主義的政治斗争の分離と折衷に常に傾斜する可能性をもつてゐることは認めるものの、この敗退を通して全体の政治過程は尊厳を最も現実的に反映した市民主義者＝無党派知識人によって主張され、「民主か独裁か」の如く極め市民的性格をもつた反政府斗争に進転したのである。市民的無党派知識人十社会党「総評」はそのプロットの形成の中で市民的政治ストライキとして六・四ストは坐われたのであった。

このような代議制民主主義制度十議会に対しての無党派知識人、社会十総評の議会主義的対応關係の毛点として暴力装置発動の無意識性を、かかる闘争の中に存在しながらも、にも拘らずそれを越えて国会突入の軟術をも併いたのに比し、日韓斗争にみられた國家権力の最も意識的な暴力を先端とした有様的対応は労働者学生市民に自衛の思想を形体させていく必要を示している。しかもかかる自衛の思想の形体の問題はトータルに日本帝国主義権力の戦後過程の推移の中で科学的に踏付けられてこそ効果的である。我が国にとってこの問題に関しては日韓斗争に限つての支配の性格について論じてきたが、明らかに言はずば十月上旬の段階（一〇／二九、一一／五六、一九）でクラスから結集した大衆に対しても引

き出された暴力に對して條約反対を通しての日本帝國主義権力のバクロの段階から、それを媒介にして全面的な日本帝國主義権力の実態と今后推進していくべき権力の高度化の方向を全面的伝統的バクロなし、それとの非和解的対立を対立にしては一步も運動は昂め効れない意識の内容を如何に物質化させていくことであつた。

我々はこの問題に關して日韓条約を契機にして全面的に推進される國家権力の高度化をブレーフアジスム体制と認識した。正に確認されねばならぬことは如何なる斗争もが國家権力との関連で全体的にバクロを深めていかねばならぬことがあるし、ブレーフアジスム体制へと推移する日本帝國主義権力の方向を今や実態的歴史的に総括し、理論が階級斗争の武器にて鋭さすしていかねばならない。

第二は市民主義運動の示登場といふ事である。まず事実を確認していく。安保斗争の五・一九に至るまでの過程での大な無党派知識人や声なき声等の民主的諸団体が登場し運動のヘダモニーを掌握したのに比十一・十二の時点では未登場であり、社会党や日共が安保を五・一九を想えし、合法主義的戦術でこれららの動きに迎合し七〇政権構想論で勢力拡大をはかるとした意図が全ったくの茶番にくへゲモニーを喪失し、とりわけ阪大自治会

して五一六日の日韓特別委員会開催から九月に至る過程での労働者学生の日韓批准阻止・国会の機能をマヒさせるところの根底的約想としての効性に依拠し、引き出された「公的暴力の本質としてのブルジョア独裁から発生する階級抑圧の暴力性を意識的な全面的政治バクロにより自己否定させながら認識させ、その集約点として國家の階級対立の非和解性の產物としての暴力の本質性を代議制民主主義制度粉碎を通して揚止させていく方向性の一步としての国会突入・国会構内集会の戦術を駆行しようとした地点であつての、即ち国会斗争の段階での権力のバクロを通して、逆に運動しつつある労働者を国会での政治的デモンストレーションから生産点でのゼホラルストライキに下駄させ、より拡大された全面的政治パクロを通して労働者（質的・量的にも）の要求をまとめあげ、このことは危機の深まりの中での経済斗争と政治斗争との統一によるプロレタリアートの権力の発端となろう）ブルジョア支配体系の根幹を掘り崩すことによって、より巨大な暴力を全面化させつつそれと対抗するものとしての街頭デモストレーションと生産点実力ストとの結合により労働者の武装から二重権力状況の創出に必然的に發展する内的過程の前段階にあつての國家の有機的全体の対応の性格であつた。

志統一を基礎にしての官僚群とブルジョア支配の組織性の確立がなされ、ブルジョアジーの幹事長等)の漏洩があり、総司令部での意体系の末端まで貫徹されていった。

そしてそれ等は、反対運動の内部で突出し、全体を主導しつつあった、言はば彼等の最も有効な道具である代議制民主制度を土台にした國家の幻想性を無法にも打破り、突出せんとする部隊に対しての集中的な抑圧と全戦線から分析一輪轍であつた。彼等は安保斗争の経験を総括し思想的、技術的に高度に訓練され、量的質的にも強化された機動隊(「履い兵、傭員」)を動員し、圧倒的な力量でもつて「公的暴力」の名の下に弾圧したのであつた。

しかも、デモ完全なサンドウイッチによる規制を破つて突出せんとする部分に備えて、国会を一方で至る機動隊や装甲車やバリケードをもつて防衛体制を敷き、非常時に備えて自衛隊の出動までも用意したのであつた。

そしてかかる過程を通して流动を開始した市民社会に対し、抑圧の実態や反対運動側の言論を統制するものとして嚴格な報道官制に努めへ、他方で自民党学生部・右翼・ブルジョア博徒までもの動員によつて官制デモから官制集会を作出し、ブルジョア政治委員会・官僚軍・ブルジョアの支柱に寄生した御用学者、文化人を制して市民社会の知的ヘゲモニーを代弁させ、それ等と呼応しながら生産点での流动を弁労働官僚と資本の工農を過

し集約しなからせれ等の全体を議会へと吸引していった。
そして自民党議員の組織性、機動性を高度に發揮させながら舞台裏での民社の捲き込みを作り、社会党的合法主義的議会主義戦術的の動向や運動の発展力を測りつゝ自信をもつて短期決戦から強行裁決に踏みきつたのであつた。かかる有機的一体性をもつたブルジョア国家の全体性の前に唯一の前衛的部隊は粉碎され展望を喪失したのであつた。
(主体的原因は別に検討するとして)
ここのような國家の暴力性を全面化させてこの全体の対応といふ事態の本質は資本主義の危機の深まり一代表制民主主義制度の変質一暴力性一民主主義意識一労働者階級の階級矛盾の深まりの全体的関連の中で総括されねばならないが、ここでは安保斗争との関連で簡単に概観してみよう。
日本帝国主義の復活自由化から膨張段階に突入する前段階にあって戦後国内国際体制を整理し来るべき膨張期に対処すべきものとして存在した安保条約再改訂は新たな体制への転換の一歩を踏み出すものとして存在しているが故に必然的に階級一階級を政治斗争に登場させるを得なかつた。
にも拘らず彼等にとってそれを乗り切る最も有効な方策は打破り一再編すべき戦後支配体制とのもの、即ち統評民間を核とする労働者の代議制民主主義制度への幻想の自然成長的市民的へのモードの利用し、圧力運動として議会に數

き出された暴力に對して條約反対を通しての日本帝國主義権力のバクロの段階から、それを媒介にして全面的な日本帝國主義権力の実態と今后推進していくべき権力の高度化の方向を全面的伝統的バクロなし、それとの非和解的対立を対立にしては一步も運動は昂め効れない意識の内容を如何に物質化させていくことであつた。

我々はこの問題に關して日韓条約を契機にして全面的に推進される國家権力の高度化をブレーフアジスム体制と認識した。正に確認されねばならぬことは如何なる斗争もが國家権力との関連で全体的にバクロを深めていかねばならぬことがあるし、ブレーフアジスム体制へと推移する日本帝國主義権力の方向を今や実態的歴史的に総括し、理論が階級斗争の武器にて鋭さすしていかねばならない。

第二は市民主義運動の示登場といふ事である。まず事実を確認していく。安保斗争の五・一九に至るまでの過程での大な無党派知識人や声なき声等の民主的諸団体が登場し運動のヘダモニーを掌握したのに比十一・十二の時点では未登場であり、社会党や日共が安保を五・一九を想えし、合法主義的戦術でこれららの動きに迎合し七〇政権構想論で勢力拡大をはかるとした意図が全ったくの茶番にくへゲモニーを喪失し、とりわけ阪大自治会

し集約しなからせれ等の全体を議会へと吸引していった。
そして自民党議員の組織性、機動性を高度に發揮させながら舞台裏での民社の捲き込みを作り、社会党的合法主義的議会主義戦術的の動向や運動の発展力を測りつゝ自信をもつて短期決戦から強行裁決に踏みきつたのであつた。かかる有機的一体性をもつたブルジョア国家の全体性の前に唯一の前衛的部隊は粉碎され展望を喪失したのであつた。
(主体的原因は別に検討するとして)
ここのような國家の暴力性を全面化させてこの全体の対応といふ事態の本質は資本主義の危機の深まり一代表制民主主義制度の変質一暴力性一民主主義意識一労働者階級の階級矛盾の深まりの全体的関連の中で総括されねばならないが、ここでは安保斗争との関連で簡単に概観してみよう。
日本帝国主義の復活自由化から膨張段階に突入する前段階にあって戦後国内国際体制を整理し来るべき膨張期に対処すべきものとして存在した安保条約再改訂は新たな体制への転換の一歩を踏み出すものとして存在しているが故に必然的に階級一階級を政治斗争に登場させるを得なかつた。
にも拘らず彼等にとってそれを乗り切る最も有効な方策は打破り一再編すべき戦後支配体制とのもの、即ち總評民同を核とする労働者の代議制民主主義制度への幻想の自然成長的市民的へのモードの利用し、圧力運動として議会に數

執行部を独立していた民学同の諸君は大衆の失敗（ストの挫折）から分裂にまでいたつての形で市民的主体は反帝的に連続的に止揚している事態は意味深い。

更にこのことは第四番目の問題とも関連するが社会党一派の提起した四千万署名が全く空洞化していることや、六・四ストが労働者も一人の市民として政治斗争に参加する義務があり権利があるとして、又ストによる灾害、混乱を急速に回復する為に組合が先頭に立って働き、世論の支持を得てその圧力が勝とうとするような民間の指導性の下に労働者が統制だて働き、スト支援に駆けつけた我々学生をビケでもって供給しようとしたのに比し、一・一二日スト東京駅の占拠斗争は下部労働者から中堅幹部層にいたるまでそれなりが戦争化し、学生を攻え入れた事実。

あるいは逆に今春の六・九グエトナム斗争ではグエ平定などを中心にして無党派知統人等市民主義者の運動が一定の伸長を示し、都議会の腐敗に対して都政刷新連盟等の「市域民主化斗争」などが登場した事態、これ等の事態を我々は如何に把握したらいいのか。結論を述べておこう。

第一は五〇年代においては大難把に言つて反帝Mとは無關係に一定の反政府性を持ち、逆に反帝運動はそれに規定されながらそれとの関連の上で発展される必要があつた。

第二にそれに比し現在の事態は市民主義

はそれが独自では反政府性を持ち得ず何んらかの失敗（ストの挫折）から分裂しての形で市民的主体は反帝的に連続的に止揚されている事態は意味深い。

第三に逆に反帝Mはそれ独自で今后の情勢に対応して発展していくことが可能であること、しかも同時に情勢そのものに提出されて生ずる、民王主義的要要求に対する対応して應えていく必要があること。

以上の三点であるが、我々は旧ブレントにおいて安保を斗争、五一九斗争以降市民主義の運動の波に飲み込まれその全体が議会主義と民族主義の補完的競合のヘゲモニーによって反帝Mに市民主義を連続的に発展させることに失敗した経験をもつてゐる。

旧ブレントの分裂斗争と分裂が正にこの点から出発したものとして存在する以上、しかもその後の新左翼運動に常にこの問題を提した以上我々はこの問題に因しては日本帝國主義国家の発展「高度化」を日本資本主義の復活へ自立化から膨張に至る階級斗争の医療で整理し、更に階級斗争と労働者のヘゲモニー、それが呼応する所のイディオルギーの三つの軸で構成的・歴史的に明らかにして踏付ける必要がある。

第三の反帝学生Mが可能であり、それが日本学連グループ内部の動搖とアラグマチックな対応、そして一・一二の国鉄スト支援斗争の一一定のしそう激性、民間幹部の動搖と下部の流動及び都学連学生への一定の接近、しかも日韓斗争の開始以来終始我々につきまとつたところの「一点突破論、危機論」更に革マル派の旧態然たる社共弾劾と反戦青年委との関係での「捕完物論」これ等に対しても我々は如何なる整理を行い如何に基本的な解説の方向を設定する必要があるのか。

結論から述べよう。

第一は安保斗争以来五年日韓斗争は鮮明に形成それを総評一民間が日韓条約の切迫に呼応しての日韓の議会主義的対応へ全面的に右傾化を開始する動向を、一〇・二九全国学生ゼネストと国会デモで決定的に左へ振り戻す方針が官僚の厚い壁によつて完全に屈辱的デモに終始、結果した大衆に展望を呈示することが出来なかつたこと。大胆に書くなら或る意味では旧ブレント全学連の「古典的」な意味での先駆性論が破産していることを確認する必要がある。このことは原潜斗争以来終始我々に問われている問題であつた。そしてこの問題に対する解答は一・五六・九、一・〇の段階で最も銃銃に問われ続け、一・五に於ける中核派の原潜斗争の総括や、日韓斗争当初の対応とは無関係な古典的シヨツク論の主張、或いは大一の段階がみられた石を投げても社

会問題化を主張した社青同解放派等、都連グループ内部の動搖とアラグマチックな対応、そして一・一二の国鉄スト支援斗争の一一定のしそう激性、民間幹部の動搖と下部の流動及び都学連学生への一定の接近、しかも日韓斗争の開始以来終始我々につきまとつたところの「一点突破論、危機論」更に革マル派の旧態然たる社共弾劾と反戦青年委との関係での「捕完物論」これ等に対しても我々は如何なる整理を行い如何に基本的な解説の方向を設定する必要があるのか。

結論から述べよう。

第一は安保斗争以来五年日韓斗争は鮮明に形成それを総評一民間が日韓条約の切迫に呼応しての日韓の議会主義的対応へ全面的に右傾化を開始する動向を、一〇・二九全国学生ゼネストと国会デモで決定的に左へ振り戻す方針が官僚の厚い壁によつて完全に屈辱的デモに終始、結果した大衆に展望を呈示することが出来なかつたこと。大胆に書くなら或る意味では旧ブレント全学連の「古典的」な意味での先駆性論が破産していることを確認する必要がある。このことは原潜斗争以来終始我々に問われている問題であつた。そしてこの問題に対する解答は一・五六・九、一・〇の段階で最も銃銃に問われ続け、一・五に於ける中核派の原潜斗争の総括や、日韓斗争当初の対応とは無関係な古典的シヨツク論の主張、或いは大一の段階がみられた石を投げても社

会構内集会を獲得せねばならぬ段階での、日本帝國主義国家との真向からの全面対決の深さと広さをもつて全面的政治パクロを実現せねばならぬ段階で、それに基本的に挫折している」と、その結果として強行采決を前にして、しかも同時に情勢そのものに提出されて生ずる、民王主義的要要求に対する対応して應えていく必要があること。

以上の三点であるが、我々は旧ブレントにおいて安保を斗争、五一九斗争以降市民主義の運動の波に飲み込まれその全体が議会主義と民族主義の補完的競合のヘゲモニーによって反帝Mに市民主義を連続的に発展させることに失敗した経験をもつてゐる。

旧ブレントの分裂斗争と分裂が正にこの点から出発したものとして存在する以上、しかもその後の新左翼運動に常にこの問題を提した以上我々はこの問題に因しては日本帝國主義国家の発展「高度化」を日本資本主義の復活へ自立化から膨張に至る階級斗争の医療で整理し、更に階級斗争と労働者のヘゲモニー、それが呼応する所のイディオルギーの三つの軸で構成的・歴史的に明らかにして踏付ける必要がある。

反戦青年委員会を軸としての労学提携の問題として一〇・二二一五の一〇月段階での斗争で国会前坐り込み戦術を基本にして下部の流動の促進と中堅幹部の動搖を引き起し、このことは日本の革命的インテリゲンチャの基本的展望の上で極めて貴重な事実である。別に言いかえれば一定の「一点突破論、危機論」更に革マル派の旧態然たる社共弾劾と反戦青年委との関係での「捕完物論」これ等に対しても我々は如何なる整理を行い如何に基本的な解説の方向を設定する必要があるのか。

情勢分析を見れば旧M派→革戦派→社青会問題化を主張した社青同解放派等、都連グループ内部の動搖とアラグマチックな対応、そして一・一二の国鉄スト支援斗争の一一定のしそう激性、民間幹部の動搖と下部の流動及び都学連学生への一定の接近、しかも日韓斗争の開始以来終始我々につきまとつたところの「一点突破論、危機論」更に革マル派の旧態然たる社共弾劾と反戦青年委との関係での「捕完物論」これ等に対しても我々は如何なる整理を行い如何に基本的な解説の方向を設定する必要があるのか。

第一は安保斗争以来五年日韓斗争は鮮明に形成それを総評一民間が日韓条約の切迫に呼応しての日韓の議会主義的対応へ全面的に右傾化を開始する動向を、一〇・二九全国学生ゼネストと国会デモで決定的に左へ振り戻す方針が官僚の厚い壁によつて完全に屈辱的デモに終始、結果した大衆に展望を呈示することが出来なかつたこと。大胆に書くなら或る意味では旧ブレント全学連の「古典的」な意味での先駆性論が破産していることを確認する必要がある。このことは原潜斗争以来終始我々に問われている問題であつた。そしてこの問題に対する解答は一・五六・九、一・〇の段階で最も銃銃に問われ続け、一・五に於ける中核派の原潜斗争の総括や、日韓斗争当初の対応とは無関係な古典的シヨツク論の主張、或いは大一の段階がみられた石を投げても社

（7）

（8）

をその自己否定による反権力思想への転化は、組合主義的経済斗争や議会主義的政治斗争は、市民的階級斗争の最左派として全学連を先端にして自然成長的総評・民同・原水禁の従事的振動を通して全体の反政府性と実現され勤評・審職法・安保等を通して定型化されたのであつた。正にかかる階級斗争の内的構造と成基に呼応してブンド・全学連は8中委九大の「平和と民主主義よりよき学園生活を守る」学生運動をより質的に高度化深化して五八年転換路線を定式化していくのであつた。即ち、情勢の社会科学的分析を通じて学生の任務を大胆に提起する」という先駆性論を展開したのである。従つてかかる先駆性論は五〇年代後その階級斗争の内在性に立脚し、その定型に密着していたが故に全面展開の可能性を本質的に展開出来たのである。これ等の先駆性論にみられる内在的有効性は少くとも六二年頃まで、階級斗争の内在的定型が崩れつつもなお有効性を保持したのであつた。六〇年代前半を過して階級斗争の内在的定型が崩壊し、新たに変質し発展しつつあるにも拘らず、それに呼応して旧理論の再把握を通して日韓の意識的に追求されねばならぬにもかかわらず旧理論の路線にとどまつてゐるが故にワシントンサイクル単線主義に陥り反動化し、スターリン主義的傾向まで内包しどぐマ化しているのである。

第三に
日共が斗争の流動過程では全つたく無抵抗の体質を明らかに露呈したことである。集会とかンバニア及び社共共斗も七〇年民主連合政府輪の構想で矛盾を縫合し、内部の流動に対し、反トロキヤンベンで官僚的に切り抜けたものの、彼等の決定的弱点は小選挙区制斗争を軸に権力との対抗から対決を迫られる時点より斗争の実践的過程で矛盾を顕在させざるものである。

Ⅲ戦後憲法体制のブレフアシズム体制への推進と市民的階級斗争から反帝階級斗争への連続的堆積—総括の視点は何か。
さて第二項で我々は日韓斗争に現れた基本的な四つの事象について若干の考察を行なつたが、再びそれを日韓斗争の政治過程に関連させておまえながら総括の中心的視角と実践的指針を引き出していこう。

他派の全つたくの客觀的外在的把握に比し我々は日韓斗争を日本帝国主義の体制的推進への結節点を把握することによつて、従つて階級形成の構造的内的発展と反撃といふことを実践的に検証しつつあつたこと、認識しつつそれを一步前進させ日本帝国主義の流動と再端の中での革命的政治的統一戦線の形成として実践しつつあつた。

正にかかる階級斗争の内的構造と成基に呼応してブンド・全学連は8中委九大の「平和と民主主義よりよき学園生活を守る」学生運動をより質的に高度化深化して五八年転換路線を定式化していくのであつた。即ち、情勢の社会科学的分析を通じて学生の任務を大胆に提起する」という先駆性論を展開したのである。従つてかかる先駆性論は五〇年代後その階級斗争の内在性に立脚し、その定型に密着していたが故に全面展開の可能性を本質的に展開出来たのである。これ等の先駆性論にみられる内在的有効性は少くとも六二年頃まで、階級斗争の内在的定型が崩れつつもなお有効性を保持したのであつた。六〇年代前半を過して階級斗争の内在的定型が崩壊し、新たに変質し発展しつつあるにも拘らず、それに呼応して旧理論の再把握を通して日韓の意識的に追求されねばならぬにもかかわらず旧理論の路線にとどまつてゐるが故にワシントンサイクル単線主義に陥り反動化し、スターリン主義的傾向まで内包しどぐマ化しているのである。

第一は社会党・日共を問わず現在の合法賊会主義路線の破綻が明確に頭在化しつつあること、自民党は勿論のこと労働者・人民は現在の既成の公任政黨の議会主義路線・代議制民主主義制度に対するあり方（思想まで含む）に根本的不信を表明したこと。それは国民総學習・総運動や議会主義リ合法主義戰術の徹底化等の内容を技術論では解決し難いこと、従がつて社会党内部に於ける思想的・政治的再編は昨年の構改理論の否定と協会派へ白坂グリーンによる農農派社会主義・平和革命論派が主流を占めたがそれにとどまらず一層の思想的動搖を繰返し、当面は七〇年の社会会党政権構築論で一時的に矛盾を消滅しながらも、その矛盾は戦後代議制民主主義の空洞化と再編の小選挙区制でもつて結着を迫られるだろう。

それは戦前二〇年中期に至る無産党運動の開始と破綻の同質的巨大なスケールをもつて、更に片山・芦田内閣の挫折と四九年戸畠村論争（五四年森戸・渭小論争）にも四歳半のマルクス主義の原則と綱領問題を含めて決定的な反共であると同時に左翼である日本型社民に對しての特殊性に審判を下すであろう。第二は巨大な社民的危機の深まりは、日本を戦後憲法体制からブレフアシズム体制への推進と日韓斗争との結合を萌芽的に実現し、それがトータルな視野をもつて把握し、その政治意識の集中化を経て六〇年代後半の階級斗争への拠点を確立しつつあつた。

だがトータルで全体的な骨格を明らかにし

ても拘らず体制的推進とそこに形成されるべき政治的統一戦線の指導性をより一層鮮明に目的意識的に意識化し大衆の現場の武器にまで消化さざるまでに至らなかつたことでもある。それは本質的に日韓条約の把握を以て世界級戦（米中戦争）・日韓前哨戦論或いは無内容な中核派の新進民主主義・国際主義の情勢分析論とは異なつたものとして、日韓斗争を戦後憲法体制からブレフアシズム体制への推進と日韓斗争との結合を萌芽的に実現し、その政治意識の集中化を経て六〇年代後半の階級斗争への拠点を確立しつつあつた。

されていなかつたのである。されば、一〇、二九、三〇に現出し、さらにそれは、一〇、二九、三〇に現出し、二九、三〇この段階で食織される程までに具体化されたいなかつたのである。

正にこれ等の意識性の全体的弱さこそが一、九における国会議内集会の實績を通して議会デモを頂点としての全国的な反帝階級斗争の緊張を解きなどこしかんしていくのである。

ついで、よりそれが実践の武器として一〇、二九、三〇の動向は解説されている、本号二〇頁

（11）

（10）

の危機の引き延しは全ゆる面で死の苦もんを見せつゝも、同時にそれをなし崩して緩和しつつ引き延してその増々矛盾を拡大し、矛盾の根源的解決を迫られるのである。我々はかかる階級的危機の性格を単純に「一九三〇年の形態（天皇制ファシズム・ナチスファシズム・人民戦線・ニューディール等々）を類似的に把握することは出来ない。

それ等の質の性格を我々は日々展開される階級斗争の内在的把握の普遍化を通してリアルに獲得していくかねばならない。

同時に右述したところの四点を軸とした憲法体制からブレフアリズ体制への推移の把握は我々の階級形成の意識性の集中として意識化され展開されねばならない。

第二次大戦後における日本資本主義の發展は極めて急速なものであり、高度成長による日本資本主義の工業生産力は西欧諸国に匹敵或いは凌駕しつつある水準に到達した。

かかる特殊日本資本主義の二重増殖の性格によるものだが、それ等の根本要因が戦後国防、国内環境の中での日本帝國主義国家の位質と結びついたものとして論及されねばならない。その要因は第一に天皇制帝國主義からの、帝國主義戦争の敗退を通しての、上から改革を通してブルジョア的に所有し、農業生産の強力的近代帝國主義への推進である。

敗戦による社会構造的経済構造の強力的再編は、前近代的半封建的地主制の要素を農地の、帝國主義戦争の敗退を通しての、上から改革を通してブルジョア的に所有し、農業生

産力の發展と農村市場の拡大をもたらした。
更に財閥解体を患しての排除と近代独占体
体形成が國家独占資本主義的政策との緊密な
結合の上に実現される条件を、生産設備建設
に有利な条件を与えた軍備激盛および軍事費
負担の軽減等の条件も付与され生み落した。
又、天皇制家臣關係・生活様式の変革を通
じて国内經濟市場の質的・量的拡大を可能にし
た。これ等の三つの要因が戦後の社會構造の
急激な変動と結びつき、特殊日本資本主義の
二重構造を近代的に再編したのである。
第二にかかる第一の要因に基く高度成長
の蓄積源泉の一部を外資に依存する形で実現
していくことである。
即ち米軍特需（約六〇億ドル）を基礎にし
約一八億ドルの民間外資導入を強化し、六〇
年自由化以降短期外資流入をテコとして、國
際貿易の旧常的赤字を補てんし、信用關係を確
立し、政府―日銀の金融政策を媒介に強力な
「設備投資元導―國內市場開拓型」経済發
展バターンを創出したのであつたのである。
ともあれここでは日本資本主義は西下イツの
如く輸出超過によつてではなく外資の導入によ
つて高率な資本蓄積の資金的基礎をえたた
ことを確認しよう。
さて以上の基礎をおいての設備投資元導―
國內市場開拓型経済發展バターンを確立し
工業園としての地位を確立した日本帝國主義
はそこに如何なる資質を内包しているのだろ
うか。

第一は工業発展にも拘らず生産設備ストックの水準はなお国際的に劣るといふ点である。いわゆる資本蓄積の国際的脆弱性である。

（一）この一例として資本設備率（一九五三—六二年の個人住宅を除く固定投資累積額を人口で割つたもの）アメリカ三二、五〇〇ドル、西ドイツ一〇、六〇〇ドル、イタリア五、二〇〇ドルに対して日本は約五、〇〇〇ドル。

第二は工業の拡張と対照的な国防収支及び国際金融の面での弱点である。即ち、戦後日本の高度成長は設備投資を軸とする国内市場の爆発的拡大を基礎にして実現され、その結果輸出依存度は戦前と較べて著しく低下し、原材料輸入依存度の高い日本の場合、相対的に国内市場を中心とする基盤として人超傾向を生み出し、それは援助特需・外債によつてカバされ急速に発展した。このような国際会面での弱さは、一般に指摘されている物的生産に比し貨幣蓄積の貧弱さという特徴を集中的に表現しつつある。

第三に工業生産力の拡張と輸出の急速なそれが約数年に分散しており、独自の勢力範囲を形成していないといふ点である。

第四に生産設備の拡張および工業生産量の増大に比して、国民生活水準および社会資本と呼ばれる分野がいちじるしく貧弱であり、民間設備投資の経済的な拡大と住宅投資の極端な低値に典型化されるが最近では社会資本

我々は卒直に日本階級斗争に於ける帝分的翼の力量が一一、九の段階で力尽きたことを卒直に認めなければならない。

しかし敗北は安易に確認されるべきものではない苦痛をもつて、しかも来るべき帝分的プロレタリアートの実践的指針として確認されねばならないものである。

安保斗争の二番せんじで、主体的要因を外在的因素・社共に前化者に転化し、相も変わらず社共批判に浮身をやつしていく草Mや、スターリン主義への傾斜をみせつつある『社共の新しい日和見主義』を発見して自らの元体的危機を陰鬱しつつあるM戦派の諸君の命數は明らかだ。

更に敗けたのは議会主義であり、その裏返しとしての技術主義と憶面もなく中間総括をする階級左翼の民青同解放派の諸君、諸君は再度『階級形成論』を読み返してみたまえ。そこには安保ブンドの総括を黒対主義の歴史からの階級批判の観念論と偽としての市民的自然のプロレタリア的正義の主觀主義自対儀として雑研としての市民主義から反動への止揚の科学を階級形成の歴史的眼界一段に一面化し、歴史の実践的主体者としての旧生産主義者に歴史的意味と思想を科学的に学びとろうとしていないが故に階級形成の客觀主義に陥りついていることがほの見えるだろう。階級形成とは正に歴史的実践者の内在的克服に内実されねばならない。

らば、君達の内部にも存在するワン・サイクル
単線主義は克服する拠点をもうだらうし、當
然にも不毛な解放一号は修正されるか打棄て
られるだらう。

小型八百共十民國▽プラグチズム路線をひた
走つてゐる中核派の諸君は已れが何故にそう
であるのかを問いつめない限りいせんとして
の組織と政治主義でもつてしては君達は民間
に転落してしまうだらう。

敗北の要因は最根本深い所にある。

我々は以上の総括の視点をふまえて実践的
視点の指針を検討するなら、再度のプロレタ
リア階級形成の内的発展との関連でのブレフ
アシズム体制の階級的性格を明確化すると
あるし、第二にそれをめぐるところの諸ヘ
ゲモニーの内的動向とそれを本格的階級的
統一戦線に転化させる方向性である。

そのことは市民的階級斗争から階級的統一
戦線への連続的止境ということである。

IV 戦後憲法体制からブレフアシズム体制への
推転

① 日韓条約を経て六〇年代后半に向かう日
本国主義國家の運動と階級斗争の矛盾の深
化の性格をトータルに見極める条件は少くと
も以下四点についての検討が必要である。我
々はこれ等の四点を分析しながらその階級的
意味を“ブレフアシズム”と仮設を設定した
かかる作業の必要性は言うまでもなく日韓
斗争の中での、日韓条約の個別爆破から全体

との必要性や、政治斗争と経済斗争の結合の指導性として極めて実践的に要請されている。これ等の事態は本質的に根底的な日本資本主義の危機の体制的危機への性格の転化と不可分な個別的政治斗争や経済斗争が内的に体制的バクロを離れて一步も前進し得ないことの表現である。にも拘らず、その全体的バクロは戦後憲法体制を軸に展開されではならない。明らかに憲法体制からブレヴァシズム一本制への推進として展開されねばならぬ。

その第一は、戦後日本資本主義の基本矛盾が出そろい新たな下部構造の再編を迫られて、いることを世界資本主義の危機の同時性連続性二等質性との関連させつつ、構造的歴史的に明らかにすること。

第二は、第一点を見究めつつ、現在展開されつつあるなし崩し的ブロックと国内下部構造の再編を分析しつつ同時に両者の有機的内的一体性を明らかにすることである。

第三に、かかる動向に内的に規定されながらも相対的独立性をもつ約想過程”イデオロギーの流動を戦後民主主義と民族問題を軸に現在的意味を明らかにすることである。

第四にこれ等を総括するものとして全体的国家の運動を明らかに把する必要がある。

今后の階級的危機の性格は一般的には金工業頭制の腐敗と規定されるかも知れない。何も言わないことに等しい。正に問題のは六手代着手より開始され始めて日本資本主義

部面での立ち遅れが生産力発展にとつて抬擡になりつつある。

ブルジョア政治委員会によつて最終的に集約したのであつた。

第五回 脱離の急速な発展による財團解体 旧 第三回
国家セクターの解体の後に國家官僚の指導権 柱・常備軍・官僚軍を五〇年代中期に至るま
かかる文部省の根柢的暴力的支

主義制度の上に高度成長―社会福祉国家の経済イデオロギーを軸にして体制内化をはがくこと。

以上高度成長過程における到達点と特徴を列記したが、かかる「設備投資主導—国内外市場開拓」型発展パターンに照応しての国家の支配構造は如何なるものであつたのか。

本格化したのである。

それに對して日常は「高度成長設備投資—国内市場開拓—産業構造の不可避的要素として集約したのである。〔五〇〕年講和一安

の展望の中に労働官僚の貢収を通し、(勿論それは戦後から五〇年代中期の労働者階級の順位に基因するが)、生産点での圧倒的合理化取組支配の上に生産性向上運動の過様に組み込み運動することであり、農民を農地改革のもたらした農業発展力を、食官制一協同組合一陣等自民党代議士等をテコに国家政策に結び付け、中小企業家等を財政金融政策等を通して吸引同化することであつた。

成長の圧力運動に転化し議会多数派を占める。このよつて、組合主義的経済斗争と市民的政治斗争に分断し、その全体を議会主義的自然

第四に、その流動の過程は、上からの構造的ブルジョア的占領権力による強力的に転用される中で下からの革命的エネルギーがその導導性が決定的に犯罪的な誤謬を内包しているが故に、上からの推移そのものと衝突する点で屈折され吸引されてしまつた革命期を経て五〇年代に至る過程で逆にプロレタリアートの敗退の中で、占領権力の性格が明確化

民族的性格をもつて階級斗争の左翼は必ず形成する地位で、日本ブルジョアジーはかかる上からの構造的再編を自己のものとしつゝ「設備投資主導—国内市場開拓」型一代議院民主主義を実現しつつ自律体運動を本格化することによって再生産する。それは高度成長による社会福祉国家論として六〇年前期に全面開花する。

第五に現在、設備投資主導—国内市場開拓—経済構造の確立を模索しつつあるが、戦後統一的な経済イデオロギーを連続的に実現させアジア経済政策と国内経済政策との統一した経済的体制を確立することに追かれている。同時にそれは連続的でありながらも異質な民族国家間関係を融合させるものでなければならぬ。

他方かかる政策は一貫して日帝の支配に於ける専制としての、民族的性格をもつての大衆間のバネを形成した日米関係を締結せざるを得ず、独立性を右記の問題と如何に結合させ

本帝国主義の対応として国際的視野から定めねばならない。即ち五〇年代中期より開始されたE.E.C.(独仏を軸とする西欧諸国)及び日本の圧倒的生産力の向上と強蓄積過程に対する米英資本主義国の競争力の鈍化とドル・ポンドの価値の低落を基軸とする相対的地位の低下を基本構造とし先進資本主義国を主要な舞台とした国際競争戦が六〇年初頭に至つて、E.E.C.日本における過剰生産の成熟、長期停滞の深化からパリ・ボン枢軸の決裂と国家間対立へと発展し、同時に平行しての英資本主義の慢性的危機を抱えながらも、全面的な設備投資の更新、所得一減税一財政等との特殊性一強性を背景に立ちなおった米帝

本年のベトナム＝日韓斗争を通して、日本帝國主義国家の國際国内での存在様式の基本的視角をなし崩しプロック化十國內經濟のなし崩し崩し的引き延しとそれに照應する上部構造の再編を軸としてトーナルなブルジョア國家主義の視座を据えつつある。我々がこの「民主主義」を發展させ連続的に此揚していくとするならそれは明らかにかかるなし崩し崩しブロック十國內經濟のなし崩し引き延し十上部構造の再編から形成される矛盾を如何に鮮明に科学的にバクロしていくかである。

が、西独との強化の下で、反仏連合を形成しながら、歐州への全面的な資本政勢をかけることによって、失遂しつつある政治的・経済的・軍事的体制の再編強化を実現しようとするのが現時点であるが、にも拘らず五〇年代の如き米帝の一元的地位は望むべくもなく、E E C 諸国とのドル不足と金運好、仏の N A T O 脱退、ローマ条約の破棄と英ポンド危機への融資拒否、それに対抗する米西独の連合的対応、英対仏独と六三年を境にして國際金輪体制の危機を背景にしながら、相對的地位の低下の中での米帝の競爭力強化の復活と E E C 諸国への全面的資本政勢と反仏連合の形成、E E C 諸国での國民經濟と國際獨占体との対立を通しての經濟総合の限界と仏独を軸とす

る対立抗争の顕在化、B E O 加盟失敗を経過しての英帝の慢性的構造的危機と帝国主義の一方の矛盾の拡大と先進資本主義市場から進歩的市場へと根底にプロツク化の衝動を持ちつつ六九年N A T O再編に向け矛盾を累積しつつある。

そして、このような先進帝国主義の矛盾を集中化した後進国革命をめぐる東南アジアの激動—世界的激動の前哨戦—は今日階級斗争の問題を一切を先進資本主義國の危機の成熟と階級斗争に集約しつつある。

かかる戦後世界の第三期すなわち帝国主義の対立と抗争を通じての帝国主義的進出の前面化が全世界の階級対立を更に深化擴大させ、国際的反帝斗争の新たな高揚への過渡的時代

として現局面をよまえながら、日韓条約をめぐる情勢に移ろう。

剩生産と構造的低落及び外貨不足として成熟一顛在化させ、かかる矛盾を基本的解決へ延命への全社会的構造的再編として開始しつつある。戦後基本矛盾の成熟と顛在化の過程を簡単に概略するなら、五五一年以降、自動車、石油、化学、合機、電気部門に全面的な設備投資、近代化投資を集中化し、それを財政政策で国家的に支援ながら全体の景気過程を主導し、かかる景気調整過程生産性向上運動の中に労働者の動員から、労働官僚の育成を遂げ、これを基軸にしながら農民（食管制）中小企業主（金融公庫、金利政策、陳等代議士）と同調し、その全体を議会政策の中に圧力運動として組み込みながら議会多数派として、自己のヘゲモニーを貫徹した。そしてかかる設備投資主導・財政政策の下で圧倒的な強蓄積を遂げた裏には世界的な統一市場の膨張と米帝からのドルの借款が背景に存在していた。

しかししながらこれらの構造が六二年の政局で潜在的に過剰生産を生み出しそれを米帝から長瓶子の導入と信用膨張及び輸出ドライバによつて蔭蔽、乗り切りながらも、他方向時にドルの価値の低下と国際的金融体制の動搖とそれに伴う米帝のドル引締め政策厳格化の中で、それが六三年の過程で全面的に顕在化していくこと。

軍事かナルチズム政権との結合をはかりつ
つあること。

第四は、その性格はかつての帝国主義の勢力圈が後進地域に対する領土的権力的支配の体制即ち植民地体制を根幹に領土としての、何程かの排他的、独占的な経済政治的支配を及ぼしていくのに比し、その性格がストレートに貫徹せず、潜行し、軍事ボナベルチズム政権の独立性を認めつつ、經濟的に後進圏の生産と生活に浸透し、これ等諸國の内部から

日帝は六二年来の過剰生産の成熟を本帝へのダンピングによつて糊塗しながらも、自己の個定的市場圈を世界的過剰生産の形成と國

際的競争戦の激化、米のドル防衛政策強化と
B E D の停滞化への移行の中で伝統的なアジア
市場の獲得に向けられていた。すれば現在
のベトナム、インドネシア、インド、バキス
ターンの活動がいまだ全面展開していない以前
の段階であつたが故に、一方で日韓会談を提
唱しながら、景気政策にプロレタリアートを
集約し、この国際競争戦に動員しながら一般
的商品輸出拡大に向けての「超党派親善外交」
をアジア全域と展開したのであつた。

このような過程が六三—四年を経過するな
かで、ドル外貨不足を軸に借用膨張が、企業
間信用を喪失せしめる程に深化し同時に過剰
生産が顕在化する時点を埋え、言わば戦後の
基本的矛盾が出そろつたのであつた。

即ち一方での I M F 危機が米の短資輸出規
制を引き起す中で日銀の信用膨張政策が破綻
し、巨大化した生産力と国内市场との矛盾を
過剰生産+利潤率の絶対的低下+信用恐慌と

〔一 増益の長期不況〕を全面的に闘争在仕事せ
かかる中で依然として金ドル外貨不足の中での過剰生産の処理を図るべき本格的な円經濟腰の獲得を提起したのであつた。

自己に引き受け、本国植民地間の旧い華南分業体制に回復することなくむしろ低調な結果の経済開発の中に深く參画する形態さえとつてゐる。

その形態は円借款をよりクレジットラインの供与、輸出入銀行の延長し輪出および対外投資にかんする金融国際諸機関への参画その他、担当國の要請による技術訓練の実施や開発計画に対するコンサルタントといった国家的活動がある。そしてこれ等を媒介にしての民間資本の長期的集中的投下である。

第五に、にもかかわらずこれ等が如何に替

工業などの衰退部門の整理と産業構造の重化
字工業という産業転換を国家政策を推進し、
そしてこれによつて低開発国の中になし崩
し的潜行的に円ブロック化をはからんとする
ものである。

さて、且帝のアジア政策の基本路線を検討
してきたが、これ等に対応し国内経済政治政

清政治政策を体制的推移としてトータルに把握する必要がある。その決定的な把握の視点はアジアに向けての市場再分譲戦の基本的な性格であるし、同時にそれと有機的内的一体性をもちそれに対応するところの国内経済政治構造の根底的再編である。従来の情勢把握の欠陥は第一にこれ等の国内国防情勢に於ける有機的内的一体性の把握の欠陥と両者の分断であつた。

第二はいわゆるレーニン帝国主義論の教義的ストレートの導入或いは、新殖民地主義論をあげつらうことによつて根底的な階級的本質を欠落させるかであつた。

我々は現代資本主義の特異性も考慮に入れつつも根底的なレーニン帝國主義論の貫徹として把え抜かねばならぬ。

なし崩しbrookの基本的路線とは六三〇六四年以降全面的なアジア階級斗争の激動に繰着する中で、「超党派アジア外交から全域

市場への拡大」といふ一派を主導的立場が保続する中であつて第一にソ連平和共存路線は勿論のことと中共路線のインドネシアに典型的にみられるような破綻を通して國家資本主義的民族経済の破綻が反動的民族ブルジョアジーと地主と軍閥のプロレットの形成を軸にし、民族主義から民族ファシズム（統制経済の導入を基盤とする）へ云々としている過程である。

④ かかるなし崩し的内プロツク政策に対する
すべく、全国内社余体制の再編を準備して
ある。
いわゆる「設備投資主導—国内市場開拓」
経済構造からの潜行的なし崩しプロツク化に
対応すべき経済構造の確定は重化学工業部門
の資本の
である集中質を根底としての資本

即ち金融・財政政策（インフレ政策による二重大衆収奪・企業減損、公債発行による国民の国家への吸引を基幹部門への重点投資、企業への直接融資、公共部門の育成化等道路等々）第三次防衛計画の推進、農業計画等）や上述の低開発諸国への民間資本と連携して国家活動（即借款、クレジットライン等）ある。

の供与、輸出入銀行の延抵押出等々)の一本を支柱にして展開されつつある。正にかかる経済構造の大規模な再編に、(二)支店の開拓と推進にてはるかに、(三)

そして經濟イデオロギーと民族憲法を融合させたところのイデオロギー裝置とその現勢によつて切り抜けんとしてある。

第一にブルジョシ！と官僚草の一体化と結
べて政治的な問題と離れてはなり得ないか故
にかかる下部構造の再編運動を呼応して、

かかる上からの体制の轉換に対しての障壁を下からの小ブル、ルンブルを國家に吸引する準備をしつつある。

東を推進し日経連・総理連等の賃金統一化運動を労働者にかけるとともに工場での従業員待遇改善等、同時に生じてこ

正にかかる意向のブルジミア政治委員会が
約しつつ新たな日本帝國主義の段階に呼応し
た帝國主義権力の高塵化をはかるとしてゐ

的労務管理機構を「機」に向由められ、体制的に定着化させるものとしてのドライバー、報告によるILO体制を導入し、反動的左翼

追記

社民の労働官僚へのモニトリングを生ぜさせ、それを起点に分解しつつある統評—国民を國家生産機械の中に組み込み右翼的に再契約を

② 政治的統一戦隊、同質の組織論的縦
構が不十分であり粗雑になつたことを
おわびする。

はがれんとしている
第二に、これ等の経済労働対策を母胎とし
つゝ議会の相対的支配力の比重の低下に対し

私はフレンチとシネマ俳優最終総監督で、文章化したいと思います。

でそれを小選挙制度を起点にして代議制民主主義制度の根本的再編による社会党の第二保守政黨化をはかりつつ焼き返し、しかもそこから生じる労働者人民の議会制度への巨大な不信に対して執行行政権力の把大化と議会からの中の相対的独立化と資本との一体化による実態的支配の強化—即ち官僚常備軍の強化（機動隊、警察の大幅強化—自衛隊の国民的帝国主義軍隊化と抗政策の強化等の暴力装置の強化）及びマスコミ教育機関、御用文化人知識人の登用、生産員の労働官僚、地方自治体でのボス等全ゆるへゲモニ—装置の全面発動、

0

再度の大衆闘争で佐藤内閣を打倒し、日韓条約を粉碎せよ！

(1) 國際情勢について注目しなければならぬのは依然としてアジア情勢についてである。その際われわれは次の三つの要因について明確な分析を行わねばならない。

第一は、アメリカ帝国主義の執拗なベトナ

大を続け、一時危機を叫ばれたドル流出も小康状態を保ち、失業者数もわずかながら減少傾向にある。

力地域において著しく増大していることである。ちなみに六〇年度と六四年度を比較してみると、商品輸出における黒字中の伸びは、第一位がアジア、アフリカ地域であり十五億ドルから二五億ドルで、第二位が西次で(一)

ム戦争の拡大に象徴されるアジア反共政策、中共封じこめ政策の強行について、その政治的経済的背景を再度明らかにすることである。第二には、インドネシア共产党（PKI）の瓦解による北京一ソ連・カルタクサ軸の崩壊、即ち北京の世界革命戦線の広範な反米民族路線の失敗について正しい評価を示すことであり、第三には、日韓国交正常化を成し遂げんとする日本帝国主義のアジアにおける今後の役割について洞察を加えることである。

(2) 巨大なアメリカ社会はその内部に依然として失業問題や黒人問題を抱えながらも、その厖大な生産力は資本主義世界のチャンピオンの座を守りつゝけている。

そのアメリカ経済は明らかに六三年以降抜

や輸出の好調に支えられた民間設備投資の増大に求められる。六四年度新規設備投資は、前年比、自動車五二%、鉄鋼四八%、鉄道二九%と増大しており、操業率も六〇年末の七七%から六四年夏の八七%に上昇している。

また国際収支対策においても、六三年七月の公定歩合三・〇%から三・五%への引き上げ、利子平衡税の成立、対外軍事費の漸減等により、一方貿易収支の好調の持続に支えられながら、総合国際収支において六〇年の三二億ドルの赤字から六三年二六億ドル、六四年上半年一六億ドルに減少している。

ここで最も注目すべきことは、アメリカの商品輸出の構造についてであり、地域別にみた場合その比重が六〇年以降アジア、アフリ

しかもこの増大の背景は、政府の「ひもつき」経済援助（経済援助、資本輸出）の増大と、それに見合つた商品輸出の増大にある。ひもつき援助の拡大は六〇年九、八月から六年一二、四月となり、とくにアジア、アフリカ地域では十五億ドルから三〇億ドルに増大し、全体として輸出増大額の三二%がひもつきによる増大とみられている。

こゝに、われわれはアメリカ資本主義の生命線としてアジア、アフリカ地域での「ひもつき援助」とそれによる商品輸出の増大がきわめて重要なものとなつてきており、この構造を持续擴大するためにはこれら地域の政治

四

- ③ ② ①

③ 最後の方が紙面時間の都合につき展開が不十分であり粗雑になつたことをおわびする。

② 政治的統一戦隊、同質の組織論的総括はアレファアとシズム体制最終統括で文章化したいと思います。

① 全国通達と照應させてお読み下さい。

的安定と資本主義世界への包含が不可欠の条件であることは余りにも明白である。

意、インドネシア右傾化への策謀、コンゴへの破れん恥な武力干渉等々がいかにアメリカ独占資本の要求であるかがうなづけるであろう。

いかアメリカの極度に退廃腐朽した巨大な社会を支えるところの唯一のイデオロギーであり、権力側の最大の武器であり、これをもつて一切の左翼勢力を非米活動といつた奇妙な論理で封殺し、ベトナムでの流血を崇高な使命にまつり上げ、その支配者の権威の象徴としてベトナム戦争の遂行が課されているということである。

こゝにこそ、ジョンソンがゴードン・ウォーターハー派につけ入る隙を与えた、アメリカ社会を統轄しているところのからくりがあるといわねはならない。

従つてベトナム戦争でアメリカは敗北することができない以上、何らかの妥協（形式的には少くとも勝利）によつて終息することになつてもアメリカが無条件で撤退することは許されないのである。

(3) 全く幼稚と思われるようなクーデターハンターによつて、インドネシア共産党（PKI）は瓦解し、軍部右派が権力を掌握するに至り、いわゆるスカルノ体制は崩壊した。

この中国政策は米中関係の変化なくしては現
在の日帝の思惑の及ばぬところであり、従つ
てその問題は現状維持を守りながら、日韓・
日台の緊密な連携の上に新たな東南アジア政
策を展開していくものと思われる。
しかしながら、インドネシア情勢の急変を

よつて日帝の東南アジア政策は、特殊に右傾化に向いつゝもその經濟的危機をますます深刻化しているインドネシアに向かつていることは間違ひないであろう。日－イ関係はこゝに確めて述べるまでもなく從来から密接な関係があり、原油資源、森林、鉱物資源は日帝の滋潤するところであり、一億の人口は一定の環境整備さえすれば有望な商品市場である。特殊な日－イ関係の確立、即ちインドネシアへのブルジョア的挺子入れが成功すれば、日帝の東南アジアにおける地位は飛躍的に強化されることとは疑ひないとところである。

日韓国交正常化を政治的經濟的踏み台として、当面日常のアジア政策の展開はダイナミックな變化をみせることはないであろうが、すでに反共國家を糾合して「東南アジア閣僚會議」なるものを來年一月に予定している。しかしこれはマレー・シヤの事情により春に延期されることがになつたが、その醸された理屈からいへば、一月では参加しないインドネシアのものと加を國策するためであることは明らかである。

このインドネシアの出来事は誠に重大である。それは第一に、後進国における「平和的革命方式」の失敗を物語り、資本主義国における最大（党員数）の党、常に中共によつて摸範生として賞賛されていたアイジットとその党は何んら成すところなく崩壊状態に陥入つたのである。これは、眞の革命的恩想と正しい方針を持ちえないところの、党員数を誇る共産党なるものがいかに革命とは無縁の位置に置かれているかを端的に物語るものである。

第二には、北京一ジャカルタ枢軸の崩壊、即ち毛沢東の「広範な反米民族路線」という世界革命路線の無惨な結果を示すものである。フルシチヨフ型平和共存路線が世界革命とは無縁であるのに對して、毛沢東型革命路線もアルジエにおいて、また今回のインドネシアにおいて破綻し、ここに大転換を迫られるに至つたのである。毛沢東の路線はいまやベトナムにおいて現実性を有しているのみであり、それすらアメリカ帝国主義の物質力の前に堅い壁につきあたつていい。

この中共路線の挫折は、中共自らが自己批判的に認めるところとなり、去る十月二三日の人民日報は A.A 会議の延期を論じる中でその旨を報じ、それに対する更に極左の方針を出すことによつて今後の転換をはかるうとしている。

このことは、後進国に対してもかりなりに一つの左翼的求心力を權威を失わしめると

また一方においては、アメリカと提携して「アジア開銀」の設立を推進している。このようすに日本帝国主義はアジア全体に徐々にではあるが広く網をめぐらし始めたのであり、東南アジア反共国家の中心として、幾つかのペールをかぶりマヌーベルを使いながらも、アメリカのアジア政策と協調しつゝその帝国主義的進出を新たに展開しはじめたことを、先に述べたアジア情勢の中で明確に見究めておかねばならない。即ち中共路線の後退と日帝の侵透といった情勢の転換が始まりつゝある。

(5) ヨーロッパの情勢について簡単に触れておくならば、E E C諸国の経済的不況の深化である。すでにイタリア、フランスにおいてはインフレからデフレに陥込み、そして再び回復のきさしを示しつゝあるが、西欧においてすら、総選舉に勝利したエアハルドが公約の就業と国民に耐乏生活を訴えるといつた声明を発表するに至っている。これは西欧諸国の大規模的な停滞基調への転換を象徴するものに他ならない。

また国際收支ボンド危機にあえぐ英國は、再度の巨額の援助によつてボンド切り下げをまぬがれてしまが、そのひき締め政策は失業者の増大といつた「正しい結果」を生み出しこう働党政権の足元をゆさぶつてしまつて、一方ではE E C分解の危機は去らず、ドゴールの国家主義と他の諸国との対立といつた深刻な争議の解決のめとれたつていい。

ころとなり、後進国不れそれが、その歴史的經濟的基盤に規制されながらも、宗教や民族意識を媒介とした排外主義的な「國家主義」に傾かせる加速的な要因となつたということである。そして大多数の後進国はその經濟的危機、政治的流動情況を民族ブルジョアジーと反共的軍部のプロレタクル形成することによつて排外主義的國家主義を一方の軸として、一方においては帝國主義と結びついて行くといつた方向に歩み出しているといわねはならない。印ベ紛争にみられるインド、ペキスタン、ビルマやカンボジヤの國家資本主義的独裁体制、インドネシア、マレーシヤ対決と印度ネシアの右傾化、シンガポールの独立等々は皆このようない動向の一環である。

このような後進国の國家主義、政治主義があるときは社会主義圏に接近したり、一方において後進圏間の対立を激化させながらも、帝國主義とのプロックを余儀なくされて行く傾向を重視しなくてはならない。

(4) このようなアジア情勢の中で、日本帝国主義は国民大多数の反対を押し切つて日韓会談の批准を強行した。

日韓会談は確かに一面において第二次大戦敗北後のわが国の國際關係における戦後処理の問題であると同時に、自立した日帝の南朝鮮への再侵略、新植民地政策としてその歴史的第一歩を踏み出したものとみなければならない。

こゝに、第二次大戦の生み出した國際的階級にかゝつてゐるといわねばならない。

従つて EEC の推移、六九年 N A T O 改定がいかなる結果を生むかは明確ではないが、それぞの帝国主義が露骨な国家利益を貫徹する型で階級的協調の新たな形態を生み出していくであらう。その方向を決定する一つの要因はいりまでもなくソ連と東歐圏の対外政策にかゝつてゐるといわねばならない。

そのソビエトは先に発表された新經濟政策の中で利潤概念を導入し、經濟發展のためには資本主義的經濟思想を積極的にとるに至り對外政策においても絶対的平和共存を固執することによつて、社会主义的結束を放棄し自己の利益のために狂奔し、もはや世界革命への何らの役割をも果しません今までに墮落してい

しかしこのことから直ちに社会主義国家を資本主義国家と同等に論ずるのは誤りであつて、ブルジョアジーにとつては例え堕落せりといえどもソビエト階級的敵であり、自国ブルレタリアートの階級斗争いかん、即ちブルジョアジーの階級的危機いかんによつてその

対応も転換していかねばならないからである。

(6) 以上みてきた如く、先進国においても後進国においても、前者においては帝国主義的ナショナリズムが、後者においては民族資本と軍部によるプラグマチックな排外主義、國家主義がそれぞれ民族の名においてその確立を模索しており、そのような方向における現時点は全体として過渡的段階といわねばならない。またこのような基本動向の中で、帝国主義と後進国のアプローチ、帝国主義同志の新たなプロジェクトが形成され、一方社会主義諸国との勝手な取引きがより積極的に行われるであろう。

われわれはこのように、一九六〇年代後半を基本的に新たな帝国主義的国家主義の確立を基礎にした過渡期としてとらえなければならぬし、このことは、左翼思想、左翼陳言の新たなる創造と再編を不可避的に要求するものとなるであろう。

日本資本主義の経済不況は更に進行しきりあり、独占資本の再編成と企業の体质改善が中心的課題となりそれに見合つた国家の経済政策が強く要請されている。

幾つかの指標を挙げてみると、鉄工業生産指数は、三五年を一〇〇として四〇年八月一七〇、四であつたがこれは七月に比して二、一%の低下である。また企業収益にしても大企業において五一八%減少している。また九月の倒産は本年二位の水準にありしかも金詰り倒産から不況倒産（仕事がないため）

にその性格が変つてきている。

そして設備投資は全く冷えきり個人消費が伸び悩むことによつて不況の構造的要因を断ちきることができない。

このような経済不況は、大企業の徹底的な合理化を要求し、多角經營から集中生産へ、赤字部門の休廻業、競合排除のための機種調整等が強力に推し進められ、一方では不況カルテルの結成、操縦の強化が行われている。

しかしながらこのような合理化は切り抜けることができず、從来鬼門とされていた人件費の合理化に手をつけ始めたのである。まず社外工、臨時工の整理、一時帰休制（東洋レーヨン、明電舎等）、希望退職（横浜ゴム、帝國織維、小野田セメント）から一時解雇へと進行しつつある。また定員制の再検討と称して東芝一万人、関西電力五〇〇〇人の削減を計画し、三菱重工業は従業員八万人中三〇〇人を出向させ七〇〇〇人を配転し、社外工一六〇〇〇人を半分にする計画を四二年春までに完成する予定である。そして人員整理は、能力主義の大義名分の下に職制（管理職）にまで及び三菱電機ではすでに待命休職制を実施している。

こゝに日経連は、これら合理化首切りの指導理念として「企業別組合主義」に従事すること、「日本のレイオフ制」を採用すること能力建立義務管理」を行うことを訴え、更に十月の総会において公務員給与の凍結を提唱した。その他七〇年に備えて経済四團体（日経

運、経団連、商友会、日本商工会議所）の統合と、労音に対抗したブルジョア的教育文化政策を財界が独自に推進するためには「教育文化コンビナート」を全国につくることを決定した。

このように、経済不況に伴う新たな合理化はできないであろう。

その側面は自民党政府の財政政策である。

その一つは財源の不足をカバーするために公債発行に踏み切つたことである。公債発行はいわゆる健全財政を破壊し公然たるインフレに對処するかがわれわれの焦眉の課題となつてゐる。

他の側面は、その一つは財源の不足をカバーするために公債発行に踏み切つたことである。公債発行は、基幹産業大企業の労働者に襲いかかってきたのであり、この全面的な資本家の攻撃にいかに對処するかがわれわれの焦眉の課題となつてゐる。

それは単に第二次大戦への過程がそうであつたといふにとどまらず、軍備拡大の財源は常に安定的に獲得されねばならずそのためにも行く危険性を明らかにしなければならない。

同時に公債財源がわが国の軍事費に向けられ、それは軍備だからである。また公債なるものは国民への借金であり、その元利の返済は再び国民の税金から支払はられるのであつて国民への負担を引き延ばしつゝ累積させる以外の何物でもないのである。

次に政府の計画している公共料金、米価の上昇である。一月ないし四月に予定された

債務上昇である。いる國鐵運賃の値上げは、三八%という戦後

中関係からの逃避は国民の眼をごまかすこと

はできないであろう。

従つて國際情勢の項で述べたごく東南アジアに対する布石を対米協調の下に徐々に打ち始めるのが佐藤内閣の行なうる当面のアジア政策である。

(10) 以上の如く佐藤内閣は(2)、(3)で述べたように経済打開とアジア外交（その行きづまりを日ソでごまかす）を遂行せざるをえないの

であるが、このような経済政策は一方では労働者階級との対決を迫られ、一方国民全体の不信と反撃を呼びおこすのである。

すでに自民党政権は、先の参院選や都議選において国民の厳しい批判にさらされており、かつまた今回の日韓国会におけるような、議會主義の自己否定をせざるをえないようにならぬ。

もはやその権力を維持するためにはその場あたりの対応策では不可能になりつゝある。

従つて資本家階級は、その課題が当面の佐藤の課題にはなりえないにせよ一九七〇年の階級の対決に向けて並々ならぬ準備をすゝめている。この方向をわれわれは正確に見抜くことによつて日韓以降の階級情勢に対応して行かねはならない。

その第一は、高度化した生産力と國際關係における戦後処理の終了を基盤に、こゝにようやくブルジョアイデオロギーの具体化、ブルジョア的全国民支配のイデオロギー攻勢を開始することである。

それは、帝国主義的国家主義でありブルジ

ア民族主義の形成である。この作業は單に教育や文化政策、労組政策などまるるものではない。

それは帝国主義國にふさわしい国内体制の確立を通して國際關係の新たな再編を遂行して行く路線に他ならない。その第一の基軸は帝国主義的軍隊の確立にあり、具体的には中共の核武装を媒介として自衛隊の核武装、核の所有によるアジア反共陣営へのモニタリングである。それは核武装（核管理）と富国強兵を確立しつゝ更に新たな侵略を展開することで行くことである。

ブルジョアジーの一端においてはすでに日本安保改定を先取りし、日米安保の再検討をいし、安保体制からのブルジョア的自立の方針が打ち出されている。それは八月三十日東京新聞論説にみられるように「アメリカのアーリジニアの全国民支配のイデオロギー攻勢を開始することである。

それは、帝國主義的国家主義でありブルジ

のに他ならない。

この方向でわれわれの視点を捉えることによ
ブルジョア的安保改定論であり、そのような形でのブルジョア民族主義、帝国主義的国家主義の確立の方向であり、より高层次元における日米関係の再確立の方向であり、国際関係再編の主体的方向に他ならない。

よつて、自共の誤つた方針、社民の思いつき的なその場主義の方針に真向から対決するところが可能である。

(2) 第二の基軸はより直接的な国家権力の強化、自民党権力の半永久化への陰謀である。それは経済危機やアジアの激励を媒介として労働者階級そのものを強力に体制内化させる方向であり、すでに民社一全労は日韓問題を契機に自民党への忠誠を宣うに至り、民間幹部においても政治的対決を極力避けつゝある。またミクロ的には労務管理の合理化、人員管理、配転等を通じて職制支配をますます強化して行くであろう。

第二には、弾圧手段、暴力装置の強化と箇

底の取締りである。日朝の争奪戦争の行方を隠すために、機動隊の質的量的強化とテロ暴徒扱いする弾圧方法、自衛隊の治安出動が実現されたのである。そしてその法的收納として刑法の全面改定が準備されている。

第三にはマスコミ教育対策であり、新聞報道の反動化、テレビ放送番組への干渉等々、また教育面では教科書内容の皇国史観、義理

反衛生運動の現状上幾處

安保斗争以降、力闘法斗争の過渡的主導権を握り、経て転換期を迎えていた全国学生運動は、既

1. 情勢の新しい局面とは言うまでもない。

1. 情勢の新しい局面とは言うまでもなく、戰後体制の崩壊の進行とその激烈な再編である。それは決して經濟主義的に理解されるべきものではなく、當面全上部構造の動搖と転換によって、結節されて解決を迫られる崩壊と再編過程である。我々は今日の世界資本主義体制の崩壊の進行と帝国主義諸國間の同盟の再編成と対立の激化、後進国階級斗争の新たな局面の中に、日本帝国主義の經濟的、政治的動向を抱えなければならない。（これは情勢の項で述べられているので、要点のみ列挙しておきたい）

かかる事態の中で日本資本主義は第一に過当競争の処理、資本の整理と集中を不況下の産業合理化として展開している。それは不況カルテルの結成、操短から更に重化学独占体を中心に企業合同、劣悪、老朽、中小資本の整理と集中、産業独占と金融独占のゆる強化の一環と共に寡占体制の確立と資本の内部蓄積強化として追求され、労働整理と雇傭費切り下げはその軸をなしつつある。

第二にかかる過程と結合して、過剰生産の処理はアジア市場への全般的な商品輸出の展開一散布されたドルの吸い上げのみならず、貿易実績、低賃金労働力、消費市場で日本資本

の肯定、平和憲法の無視等、また日經連財界による教育文化コンビナートの結成など、をして大学における自治権の縮小などに露骨に現れきっている。

特に重視すべきことは、教科書検定に伴う教育内容の改変と、いまだ統制のきかない大学教育、大学自治に対して新たな挑戦を試みるであろうということである。

第四回は、小選挙区制から憲法改悪への路線である。第四次選舉制審議会の答申は明治頃までにまとまる予定であるが、この陰謀に対しでは今から注意深く対決して行かねばならない。

以上述べた如く日韓後の日帝の階級攻勢の方向は、帝国主義的国家主義ブルジョアシヨナリズムを確立する形で、ファシショ的な國家権力の強化を志向するものである。まさに六〇年の安保改定と日韓会談批准によつてその現実的基盤の完成と、その切実な必要性がブルジョアジーによつて明確に認識されてきたということである。今、海外侵略の野望と国内体制の帝国主義的再編強化に具体的に乗り出した日本帝国主義には日韓案院強行通り過ぎを突破したにもかゝわらず、この日韓から年末斗争さらには春斗へと向う日本労働階級一般の動向は、民間右派による日韓斗争に対するネグレクトにもかかわらず象徴的には11.2の国労ストにも見られる如く、極めて流動的であり、民社同盟の大會方針にみられる一層の右寄り路線より安保改定、自衛権確立

既に明瞭かにされている如く、今日の日本資本主義の過剰生産とドル外貨不足という、戦後発展の累積的矛盾の露呈一構造的不況は、日本資本主義の根底的再編へ新たな段階へと追いやつてゐる。周知の如く戦後のドル外債導入に依存した過当競争的独占の強蓄積一内市場分割戦は、ドル危機一ドル引締めの下に、蓄積された過剰生産を一挙に顕在化させ利潤率の低下は信用危機を引き起し、それにより長期外債の流出を招き、不況を深化化する

原資本主義は、貨幣の供給と需要の均衡を目的とする。この立場から、日本は、本の下に包括し、国内過剰資本の処理と結合させた資本輸出が、経済整形成に向けて追求されている。それは市場の安定的支配により政治支配と結合されている。第三に以上の過程は、総資本的立場より国家の強力を介してテコとして展開され、帝国主義的インフレ財政政策は、公債発行、公共料金及び大衆消費税引上げ等と徹底した大眾取扱をもたらし、集積された資金の独占への供与、公共投資による市場

創出と生産基盤整備、軍事産業開発、更にアジア市場確保に向けての政府資本輸出とふり向けられている。又産業合理化の頂点として国有企業の合理化を大規模におし進めている。

以上の動向は戦後政治過疎の処理と転換を

本主義の新たな社会的支柱として登場しつつある。この過程は今日の合理化の焦点である。公労協、公務員の賃金斗争、反合理化斗争とILLO問題との絡み合いの中に集約的に顕在化しようとしている。現在の労資の力闘保の

それを支える政治アロツクの形成として進んでいる。即ち体制的危機の進行は、戦後の英米派外務官僚の指導の下に、独占間の競争的結合を軸に中小ブルジョアジー、小農のアロツクを自民党の分派的結合を通じて形成し、

全上部の構成としてもたらしつゝある。第一に國家の協力的な介入をテコとした不況下の産業合理化は、巨大独占体の全社会的比重と階級との矛盾を圧倒的に増大させていく。とりわけ資本の整理、集中として展開される生産過程の合理化は、労働者階級への大規模な

焦点であり、国家の強権的支配の直下にあり（＝総資本の労働者支配の根幹）民同内の左右のヘゲモニーの最終的結着点に於ける斗争は、全体的な政治的展望を要求している。以上の動向は五五年以降の生産性向上運動への協力を軸に、日鋼室蘭—王子製紙—日鉄新潟

他方總評（リ日本の組合主義）、都市市民的インテリゲンチヤと中間層、社共共斗の都市的市民的プロレタリアとの抗争を、二大政党制―議会―政府を通して議会制民主主義の内に機能的に処理してきた体制を解体させ、その伝統的様式に於ける自民党支配集約力の低下を

人員整理、圧倒的労働官僚化をもたらし又販金凍結、切下げの動向は、大衆収奪の強化と共に全般的な生活危機を進行させている。それらは中高年層を含めて労働組合を振り動かし、労働者大衆と労働官僚の分裂を激化させつゝある。他方資本の労働者支配は「これまでの生活を維持させる」事が出来ないが故に極度に強権的性格を露呈し、合理化による新たな生産点支配秩序を、この強権的支配と結びつけている。労働官僚の組合占拠はかかる資本攻勢への労働者大衆のなし崩し的敗北へ後退の上に、資本の強権的支配との癒着に依拵しつゝあり、かゝる指導部への不信は日に日に増大しつゝある。かゝる動向こそ同盟・総評中立労連を横断的に結集した I.M.F.、J.C.の結成であり、資本集中日大孤立に対応する官僚的大組合を志向している。その反共（＝反左翼）経済主義は I.L.O. ドライヤー報告の路線と結合し、危機を深める日本資本

（日教組）三井・三池と戦斗的突出部分に対する各個撃破を通して、合理化・労働強化と職場支配を貫徹し、それを内的軸にした産業別全国的賃金斗争の展開が独占の高利潤の下で一定の妥協の下に賃上げと民間的（）日本の組合主義の定着を形成した動向とは決定的に異なり、人員整理と賃金構造を軸にした合理化が全般的に激化し、新たな生産点支配秩序（）徹底的な資本の論理による強権的支配の創出と共に、日本の組合主義の右からの再編を進め、その集約点を労働組合機構と国家の行政的支配機構との癡着に見出そうとしている。

以上の過程は国家の幻想性の根柢の破壊として政治過程に反映され、更に中小資本の倒産・整理事業と独占への吸収・系列化、農業の再編と小農制の矛盾と崩壊の進行と結合して社会的危機を進行せしめ、国家の全社会的幻想性の破壊の進行（）戦後政治支配体制の集約力（）

既に明らかとな如く、戦後の日本は資本主義の確立と発展、世界市場への登場は、同時にその構造的危機を抱え、しかも戦後世界資本主義体制の崩壊過程、帝国主義諸列強間の激烈な抗争という国際的条件の下になされねども、在位せりてきただからこそ事態の進行に対し、資本の集中は巨大独占体を軸にしたブルジョアジーの政治的結合を強め、龐大な官僚群と執行行政権力との継着を圧倒的に強化し、行政的支配を増々強めている。又この過程は同時に自民党の右派強硬路線への結束を促し、議会制政府から「市民社会の外に立つ」公然たる独裁政府という性格を明らかにし、議会制度の再編を用意し、更に政治権力との斗争に突出して来る部分に対する徹底的弾圧、暴力機構と軍事装置の自立的強化を生み出している。以上は全体として日本帝国主義のアジア進出の政治過程に主導され、又テコとしている。

それをも含めた米・仏対立に現われてゐる如く、
帝国主義諸列強の対立、抗争の激化の下で、
に於ける、今日の国家的対立の胎動に現われ
た事である。大九年NATO再編を焦点とした
この過程に、米帝はドルの維持強化・ボンド
交渉とアジア市場の利権の一足の譲渡との引
き換えでもつて日・米・英連合を築き、再び
世界市場と國際政治に於けるハゲモニー確立
に向けて再編を開始している。その中で日本
帝国主義は、この米帝のアジア市場へのドル
撤布に依拠しつゝ、自己の経済圏確立を追求
し、従つて日米同盟はアジア市場獲得をめぐ
る金融的同盟といふ一層侵略的帝国主義的同
盟の性格を明らかにし、それ故に動搖性（内
部の利害対立の激化）を露呈してゐる。第二

力更生路線での解決を追求した中共流革命路線の、帝国主義のまき返しの前への敗北であり、「民族ブルジョアジー」、地主、軍部のプロツクによる国家主義の胎動は、この後進國危機を帝国主義經濟圏への新たな從属的結合によつて解決をはかる路線として生まれつつある。これらを背景にベトナムの革命と反革命の戦線は膠着化し、激化と共に泥沼的様相をみせつめる。日本帝國主義のアジア市場進出と円經濟圏確立の動きは、韓國から台灣、更にインドネシア、タイ、ビルマとの革命の一連階の挫折を米帝のドルと結合しつゝ円支配商品輸出から資本輸出へ、更に帝国主義的政治支配へと結びつける路線として進行しつゝある。以上の二つを結合させ、米帝と後進國革命の間隙を縫う如き日帝のアジア進出こそ、なし崩し的プロツク化の進行（或いは潜行するドゴール主義）にこそ他ならぬ。それらは戦後國際關係の處理（中共との対抗）・アジア自由陣營の強化と國家的利益といふ、

(2) 以上の全過程を総じて書うならば、戦後の日本独占資主義の急速な確立と発展は、戦後民主主義の反動化を通して帝國主義上部構造を形成し、プロレタリアートの戦後革命の敗北から一連の突出部分の敗北、更に急進的小ブルジョアジーの敗北を通して、議会制度に二大政党制・自民党政権を頂点に、日本の組合主義と市民主義、及び戦後民主主義諸機構の官僚化と行政的支配―治安警察と自衛隊―日米同盟を支配の様式として定着させ、完成し、「一流の帝国主義」に向けて世界市場への登場を開始した。だがそれは日本帝国主義の復活を支えてきた戦後の世界体制の崩壊過程という國際的 situations に直ちに直通し、日本市國主義の膨脹といふ帝国主義体制の本格的确立は、帝国主義諸列強の激烈な抗争の開始

の内容は後進国革命斗争の一定の挫折と後退に於てよつともたらされつつある。インドネシアに於る軍部に代表された右派のまき返しとKPIの敗北、アルジエリアのベンベラ失脚以降の國家主義の微動、印ベ戦争コンゴ・クーデターそしてビルマ・カンボジアの國家主義への動きは中共路線の下での後進国革命の挫折による運派の屈服路線の侵透を意味している。それらは明らかに大〇年以降の後進国の国家資本主義の恒常的危機を、反米民族自立、自

個別の處理から全体的展望を明らかにしつつある。第三にその政治的反映である軍事問題に於ても、中共路線との対決を宣言しつつ、米帝の極東戦略の傘下の中から、独自の核管理、独自の核保有の追求を開始し、又国連に於る地位強化—アジアへの自衛隊の国連軍としての派兵を準備し、かゝる軍事力強化は公債から財源ひき出しを含めた第三次防衛計画として進めている。それらは権力の中に於る軍部の自立的強化を促し、それと國民との直

資本主義は、世界資本主義の構造的危機の深刻化の下で直ちにその矛盾・脆弱性を露呈し、戦後発展の基盤の根底的再編を余儀なくされている。この二つの要素が絡み合う中で、日本帝国主義の新たな発展は同時にその内的發展の喪失と停滞・急速な腐朽化であり、従つてその反動的侵略的暴力的性格を急速に強め

成した上部構造との矛盾を急速に激化させ、その変質へ再編へ新たな帝国主義上部構造の構築を要請している。既に六〇年以降その変質と再編は独占の強化と結合して議会制度一大政党制へ日本の組合主義と市民主義の内解体、その行政的支配と暴力装置強化への變更として追求してきた。だが今日の全般的な階級矛盾の激化と階級関係の再編は、急速に諸階級と現在の上部構造との矛盾を激化させ、政治過程への大規模な登場を促している。当面日本帝国主義は国際的な独占間接力による戦後体制の一定の維持、及び暴力な政治運動の未形成の下で幻想性を出来るだけ維持しての、強化された独占・権力の社会的行政的支配の強化に依拠し、又それをかりつつも、大衆の政治過程への登場に対する強権的抑圧・政治権力の暴力的強化、それと巨大独占の社会的支配の強化との結合、それに結合する社会的勢力の抽出と結集を追求しつある。

以上の動向こそ巨大独占と行政権力の社会的行政的支配強化となし崩しプロレタク化の過程によるアジア進出とを結合した帝国主義国家確立へ腐朽性と暴力性を軸にブレヴァシアズム体制確立の過程に他ならない。

(3) 以上の中でも日本階級斗争は新しい局面を迎えている。既に以上の情勢の激動と準備過程は、昨春米公労協の4・17斗争の大衆の高揚と挫折、昨秋の原潜斗争の全国的政治斗争

と共に斗いの条件を変化させていく。又大衆の斗争への自然発生的登場の性格と内容をも大きくかえていく。当然既成指導部の「意識性」と戦術も変化をとげつつあり、様々な戦斗組織のもつ意義をより深くしている。そして我々の意識性、組織性も過去を内在的に止揚されねばならない。

既に明らかにした如く、今日の階級矛盾の

と生産点実力斗争、日本帝国主義打倒労働者権力として展望し、この初期の局面における学生運動の意識性と指導性を先駆性論として展開した。かゝる意味に於て旧ブントは日本階級斗争に於る最も意識的要素として存在し安保斗争は全局面にわたつて学生運動を指導的要素とした。だが安保斗争はそれが国家との全面的暴力的対決に至り、政府危機を政治危機へと転化すべき時点に於て、尚労働者階級の独自の登場はなく、直接民主主義の要求に立脚した戦斗的斗争は、この政治的頂点に於てもその社会経済的基礎を意識した帝国主義国家との斗争へと転化しえず、資本の社會的権力の打破と結合しえずブルジョア資本秩序の破壊を推進しえず、市民主義運動として國家の幻想性、議会主義の内に集約され、旧ブントもそれを打破して進むべき方向をもちえないまま、この過程で部分的ではあれ、自然発生的に結集し形成された下部労働者大衆の生産点地域での戦斗的行動組織の斗争と及びそれと学生運動との新たな提携を指導しえぬまゝ、自然成長性と市民主義者、社、共プロレタクの国民共斗の内にのみ込まれ、崩壊した。

斗争への自然発生的登場の性格と内容をも大きくかえている。当然既成指導部の「意識性」と戦術も変化をとげつたり、様々な戦斗組織のもつ意義をより深くしている。そして我々の意識性、組織性も過去を内在的に止揚されねばならない。

既に明らかにした如く、今日の階級矛盾の激化と階級関係の変動は、全上部構造の動搖と再編—新たな帝国主義国家確立の政治的諸関係の変動を生み出しつつある。それは既に合理化の過程の中で、或いは生活危機の進行の中で、これまでの資本と労働の共存関係の崩壊—資本の攻勢に対する労働者大衆の不満と不安の圧倒的増大であり、労働官僚と下部大衆との分裂の進行であり、資本の強権的支配の強化と政治支配機構との競争である。そしてこの独占の支配と攻撃に対する労働者大衆の斗争は、公労協、公務員を焦点に激化化されることは、政治制度との斗争を要求せしめていく。その未来は國家独占资本主义の国家権力の打倒か絶望的屈服しかない。これら的情况は中小企業の相次ぐ倒産、大学紛争の激化を含めて全社会的に進行している。そしてその政治的表現を当面自民党政府に対する議会反対党に見出している。だが同時にブルジョアジーの政治攻勢の激化と共に自から政治斗争への結集を開始している。この政治斗争は明らかに今日の社会的危機の解決の要求を内在する。そこで今後の対応策は、

は、増々その侵略的暴力的官僚的収奪的性格を強めつゝある日本帝国主義国家に対する全面的改革を要求する斗いに發展するであろう。しかし上部構造の新たなそれへの転化が、それ自身の矛盾の資本制の矛盾との結合のうちに、過去の諸要素の温存と新しい性質一結合として展開する。そして現在その旧來の要素は社共・民同左派によつて担われている。その合法主義的議会主義路線は、今日の帝国主義権力の暴力的官僚的性格の前面化に対し、それとの対立に於て増々議会の幻想性をかゝげ、そしてそれらが社会的危機の解決を担おうとすればするだけ、その幻想性を上部構造全体に対する普遍的な幻想的共同性へと高められ、国民的民族的利益をかゝげた社民的中間政府或いは民主連合政府の合法的な議会政府構想へと進まざるをえない。しかしそれは権力との直接的斗争をもちえない事によつて実体喪失し、大衆の發展性に対する抑圧として、その指導は官僚的性格を強めざるをえない。他方民同左派は昨年の春斗來金屬部門の右派への敗退から、I.M.F.、J.Oグループを生み出し、公労協に於る右派民同の抬頭を許している。そして右派との抗争を組合官僚から離反しつゝある下からの大衆的要求を背景にしながら見えない彼らにとつて、しかもその要求を斗い抜けない彼らにとつて、方向は大衆的

ム斗争に於る新たな戦斗的動きを生み出してきた。これらの日本帝国主義の今日の矛盾の深部からの大衆的大戦の高揚の兆は、未だ明確な結節点と政治的焦点をもちえないまゝ、発展の方向性そのものを明らかにしないまゝ、全般的社会危機の潜在的進行と旧来の議会制度を通して上部構造への不信を表明してきた。だが今秋の合理化攻勢の激化と、とりわけかかる情勢の結節点たる日韓条約批准の情況は、これらの全国的政治、經濟斗争に、明確に一つの政治的対決の焦点を要求し、それを斗い抜く全国的方向性と階級的展望を要求した。(総括の項参照)

階級斗争の新しい局面への転化とは、我々にとつて言う迄もなく五〇年代の斗いとの対比に於てである。六〇年に至る斗いは、独占の強化・強蓄積に対するプロレタリアートの社会的敗北、生産点での資本秩序への包摂過程を底にしていった。にもかかわらずこの斗争の敗北は各地、各職場に戦斗的政治ブループを生み出し、戦後民主主義の反動化を通しての帝国主義上部構造構築に対する斗いを、民主主義斗争或いは平和斗争として形成していた。それらは帝國主義復活に対する斗争の出発点を戦後憲法の「平和と民主主義」理念においていたが、それは斗争の性格を極めて自然成長的なものにし、他方権力の強権的性化をひき起し、それは出発点の戦後憲法の平

は、増々その侵略的暴力的官僚的収奪的性格を強めつゝある日本帝国主義国家に対する全面的改革を要求する斗いに發展するであろう。しかし上部構造の新たなそれへの転化が、それ自身の矛盾の資本制の矛盾との結合のうちに、過去の諸要素の温存と新しい性質一結合として展開する。そして現在その旧來の要素は社共・民同左派によつて担われている。その合法主義的議会主義路線は、今日の帝国主義権力の暴力的官僚的性格の前面化に対し、それとの対立に於て増々議会の幻想性をかゝげ、そしてそれらが社会的危機の解決を担おうとすればするだけ、その幻想性を上部構造全体に対する普遍的な幻想的共同性へと高められ、国民的民族的利益をかゝげた社民的中間政府或いは民主連合政府の合法的な議会政府構想へと進まざるをえない。しかしそれは権力との直接的斗争をもちえない事によつて実体喪失し、大衆の發展性に対する抑圧として、その指導は官僚的性格を強めざるをえない。他方民同左派は昨年の春斗來金屬部門の右派への敗退から、I.M.F.、J.Oグループを生み出し、公労協に於る右派民同の抬頭を許している。そして右派との抗争を組合官僚から離反しつゝある下からの大衆的要求を背景にしながら見えない彼らにとつて、しかもその要求を斗い抜けない彼らにとつて、方向は大衆的

和と民主主義」理念との矛盾をもたらし、この否定性を發展の媒介としていた。従つて争は、この理念を絶対化し、平和主義と一般民主主義擁護を絶対化し、更にそれらを国民的民族的利益とその統一戦線にまで幻想的に揚棄し、その戰術の中心に議会主義をおく事を意識性とする官僚的指導の外から発生し、絶えず对立に至るという意味では二重に自然発生的であつた。それこそ常に日本型市民の左傾化をひき起し、又日共の内部矛盾と下部の離脱を生み出し、下部の大衆的共斗組織と中共の国民党共斗指導部との対立を生み出したものに他ならない。学生運動はこの矛盾を学生運動を通して意識した國際派・旧ブントに指導され、この下からの自然発生的戰斗性を最大限發揮し、労働者階級のそれとの結合を育成共斗と戰斗的街頭斗争を通して追求した。旧ブントはこの過程で、既成指導部の「意識性」の克服をスター・レン主義批判（「日社会主義と体制間矛盾論の民族主義と生産力主義過渡的段階の絶対化」）二段階戦略に対する永続革命とプロレタリアートの独自の戰術、戰術の日和見主義（形而上の政治主義に対する「平和と民主主義」理念との矛盾、或いは大衆的高揚の社會指導への集約が波状的に続く中でそれの民主主義としての定着、この止渴を街頭に於ける戰斗的實力斗争―斗争のへゲモ

要求とエネルギーを議会政権構想の幻想的共同性に結びつけて組織し集約する以外ありえない。当面大衆的要求と斗いはこの潮流を通して登場しつつ、その発展の要求は大衆的戦斗的斗争機関の形成と、下からの新しい斗争へモニーの創出、市民的中間政府と労働者自己権力との分離の追求としてしか担われない。反帝社会主義労働者権力の方向は、この過程に於て、今日の深刻な社会経済的要求を資本と反動的労働官僚の強權的支配の打破に向けて徹底的追求と、日本国家独立資本主義の國家権力に対する直接的全面的斗争の追求及びその両者のダイナミズムの追求であり、それを一貫して戦斗的に担う部隊の全国的系統的結合と形成でなければならない。そこにはあらゆる側面からの要求と斗いを帝国主義国家との斗争の中心環に組織し、その暴力を突破し、斗争主体に担われている幻惑性を解体する戦斗的実力斗争の展開、それを支える日本帝国主義国家及びそれと全国人民との矛盾、労働者階級の下からの動向を見究め、それとの結合を追求し、社民的潮流を通して生み出している大衆的行動組織との大衆的共闘關係を成立させ、自から全国的政治斗争を明確化し、労働者階級の下からの動向を見究め、それと頂点をもつた斗いとして実現する事によつてこれにダイナミズムを与えねばならぬ。そして斗争の戦斗的中核部隊の意識的結合を成し遂げ、更に依然として社共共斗指導機

の下に自然発生的に結集される学生大衆の高揚に方向と任務を与え、それを実現する事によつて新たな次元への大衆の結集と指導との結合を追求しなければならない。こゝでも今日の帝国主義権力の暴力性に對して「挑発の論理」を用い、斗いの分断と議会主義的合流主義への集約をばかる日共と民青に對して、全国的政治斗争のその目標への大衆的結集の圧力と、帝国主義権力との斗争の今日の任務と生み出されるべき大衆的統一戦線の現在的構造と政治展望とその不斷の現実化によつて粉碎し、又動搖を与えねばならない。(以上総括の項参照)

既にこれらは昨秋の原潜斗争以来の労学の歴史した戦斗的街頭斗争の展開、或いは今春のベトナム斗争での、労働者の大衆的行動組織の形成、そして学生運動に於る戦斗的中核部隊の増大、全国的政治斗争の分散的形成から全国的結合の強化された大衆的斗いへの発展の方向と部分的にではあるが生み出されてきまでもかゝわらずその自然成長性は自からの意義と展望を充分に明らかにしえず、拡大と被及を遅らせ、分散性を克服しきずその限界の露呈と斗いの集約過程で右派と日共と民青の現実の斗いより後退した地点での伸張を許してきた。又中間的潮流と主体的任務を喪失した観念的自然発生主義者の矛盾と没落を必然的成り行きにまかせるまであつた。我々は今秋の日韓斗争の全国高揚を以上提起した視点から徹底的に総括し、反帝学生運動の

当面する任務につけて

現在地点を明らかにし、その発展の傾向性を
全面的に取り出し、又弱点を曝け出し、一つ
の明確な方向へと組織して行く、組織的課題
にとりかゝらねばならない。

その素材として現在手許に集中されている斗
いの報告と情報を提供したい。(へ
頁から
の全国的斗争の情況を参照されたい。)

当面する任務について

(1) 日韓批准阻止斗争はいまだ終了していない
い。しかしながら衆院を通過し自然承認が確
実を以上、この日韓を粉碎する唯一の可能性を
があるとすれば佐藤内閣の打倒以外はない。
それをめきにした「国会解散」は全くの空語
である。従つて社共の国会解散・総選挙・内
閣打倒は全く非現実的でありますアズブの議会
主義であり大衆の憤激を正しく組織する方針
ではない。

われわれは、あくまで日韓条約を参院強行
突破せんとする佐藤自民党政府と対決し、更
に議会において暴力採決を行つた佐藤内閣の
責任を追求しつゝ大衆をその抗議斗争に組織
して行かねばならない。国会解散があるとす
れば佐藤内閣の打倒以外に道はないことを確
認すべきである。

(2) 12. 7斗争は従つて再びの大衆斗争とし
てねり組まれねばならない。そしてそれは更
に日韓条約批准書交換予定(十三日一二十日
)に対する斗争へと発展させ、最後まで日韓斗
争に対する我々の戦列を強化、拡大しなけれ
ばならない。と同時にこの日韓斗争の中で新
左翼諸潮流の無原則的な活動と方針の破産は
全面的に暴露されたし、中間結括の過程の中
でこの斗争に結集した学友を更に次の斗争へ
と準備させ、議会の戦列に明確に組織する方

選とし、それで構成し、それを先進国中間地帯へ結びつける誤りは、この日韓斗争の中で日共が我々の運動に対し反トロ・キャンペーンを内部統制の為に異常にくり返し、彼等のデモを警視庁よりも立派に統制したとほどの裏には、現在の力関係すらもブルジョアジーの権力の強大化と扩大の前に進行する体制転換の嵐が侵透していることを考えねばならない。かかる傾向はすでに述べた如く全くの議会主義的集約の方向性の真理化であり、国家体制そのものの変質を全く度外視した誤りを徹底的に暴露せねばならない。

この日韓斗争の中で日共はある程度社会党左派の巻き込みに成功している。しかしながら彼等のいう民主勢力の團結こそ日本階級斗争における分断策謀する方向であり、一貫して戦斗的学生運動排除の方向であることは明白な事実となつて更に証明されている。なだらに民膏に対する先制攻撃を開始し、各大学での選挙選斗に勝利せよ！

米価・私鉄・国鉄と統く公共料金の大巾を上げは、佐藤内閣の体制整備の必然的な結果であるが、今我々が想起せねはならないことは、それらの政策が半ばなくずし的に日常生活に潜んでゐる現実である。日韓斗争においては、運動員として戦斗的學生運動が確かに大勢をもつて登場して来た。しかし安保以降五年の斗争は六〇年代後半の斗いのパターンとしての鮮明さは明らかに具体化されていないばかりか、諸潮流については安保6・15斗争の再現と街頭ラジカリアムのみが組織方針と斗いの発展と展望をみた語られて来た。そしてそれは総括部分で述べた如く種々の課題の再検討を我々に要請している。我々は再度新左翼の立脚的と思想的党派性を明らかにする作業を開始することが絶対不可欠であるのみばかりか、新左翼整備が突破主義がもはやそれを媒介として展開されないことを認識しなければならない。

衆ギヤンと斗いの歪曲を策謀した日共・民青系諸君に對する彈刻と先制の攻撃を真向から間一貫して反トロキヤンペーンに終止し、大々的な反トロキヤンペーンは学生戦線によるものであるといふ証左である。日韓斗争における具体的斗いの局面局面における彼等の犯罪性と北京路線の敗北の結果をあばき、反米民族路線の結末を更に一層鮮明にしなければならない。それは單なる日和見主義といふ點で攻撃するのみではなく、彼等自身の提起した『議会主義を守れ』というスローガンに象徴される全くの体制内的運動とそれの無謀介的結合としての反米・愛國民族路線を左から右の論理展開として暴露せねばならない。日共・民青系はこの日韓条約批准段階でみられた佐藤自民党政権の強行採決という暴挙は佐藤政府が全民主勢力の斗いの前進と高揚の前に追いつめられての結果であり、我々の斗いは前進している。更に団結して佐藤内閣を国会解散に追い込み、国民生活・民主主義を擁護しようと呼び、民青全学連委員長川上君があつては11・26集会において「日共・社会党の都市に於る得票数は伸びてゐるし、逆に国民党票は減少してゐる。だから政府は国会解散を行ひ事が出来ないのだ」と述べ選動を全くの社民路線へと転化するばかりか、現在の佐藤体制が力関係の問題としてではなく、彼等の路線としての体制の改編、即ちアレフ・アシズム体制への移行を開始してゐる事実を全く洞察し得ていない。歴史的にも全世界の共産党がアレフ・アシズムの前に全くの無抵抗のまゝ激化したように、一切の関係を「力」の問

結びつけた誤りは、この日韓斗争の中で日が我々の運動に対し反トロキヤンベーンを内部統制の為に異常にくり返し、彼等のデニスを警視庁よりも立派に統制したと信じる極めて、現在の力関係すらもブルジョアジーの權力の強大化と拡大の前に進行する体制転換の嵐が侵透していることを考へねばならない。かかる傾向はすでに述べた如く全くの議会主義的集約の方向性の真理化であり、國家体制そのものゝ姿質を全く度外視した誤りを徹底的に暴露せねばならない。

この日韓斗争の中で日共はある程度社会党左派の巻き込みに成功している。しかしながら彼等のいう全民主勢力の團結こそ自本階級の斗争における分断策謀する方向であり、一貫して戦斗的學生運動排除の方向であることは明白な事実となつて更に証明されている。ながらに民膏に対する先制攻撃を開始し、各大学での選挙選斗に勝利せよ！

(4) 日韓斗争の収約と同時に、新たなる佐藤内閣への対決の体制を準備しなければならぬ。それは単に日韓の延長上にあるのではない。大巾賃上げを絶対獲得すべきである。大巾賃上げつとつても現在の日本経済に対する重大な政策への対決にある。

労働者階級においては合理化人員整理に全面的に対決しつゝ、来春斗においては大巾賃上げを絶対獲得すべきである。大巾賃上げことである。

そして、日韓後の佐藤内閣のアジア政策やまた全国民的課題としては公共料金の賃上げ、なからんなく国鉄運賃値上げ阻止の斗いに立することを忘れてはならない。

米価、私鉄、国鉄と統合公共料金の大巾を上げは、佐藤内閣の体制整備の必然的な結果であるが、今我々が想起せねはならないことはそれらの政策が半ばなくすし的に日常化している現実である。日韓斗争においては既に学連を軸として戦斗的學生運動が確かに大躍進を遂げた。しかし、その運動は、主として運動員と戦斗力を持つて戦ひぬいて来た。したがって、安保以降五年の戦いは六〇年代後半で、その戦いのパターンとしての鮮明さは明らかに具体化されていないばかりか、諸潮流にあっては安保6・15斗争の再現と街頭ラジカルズムのみが組織方針と戦斗の発展と展望をあきらめに語られて来た。そしてそれは総括部分でもふれた如く種々の課題の再検討を我々に要請している。我々は再度新左翼の立脚的と思慮的党派性を明らかにする作業を開始することが絶対不可欠であるのみばかりか、新左翼勢力が就中日韓を決戦として把握した諸君の一点突破主義がもはやそれを媒介として展開出得ないということを認識しなければならない。政府支配者階級の大衆収奪路線のレベルはすでに確実にひかれている。しかしそれは決して單なる経済斗争としては戦われてはならぬといし、佐藤内閣の全面暴露へとその戦いを組織化せねばならない。政府支配者階級の攻撃は日韓強行採決以降急ピッチであり、佐藤の政策自身、鋭く政治への介入を客観的に為すことをしめていく以上、我々のそれへの有効的配置こそ今間われていくといわねばならない。かかる政治活動は自民党中央の一層の強度化され、佐藤内閣の大衆收奪の政治的暴露を！

と没落、全都二千、京都千、大阪四百、北大二百の恒常的結集、大衆の自然発生的高揚との結合の開始、各地での戦斗的労学提携とそれを軸にした地方の斗いの胎動と首都との結合、社学同への斗争へゲモニーの移行、マル戦の没落、中核の後退、春以来の一貫した政治活動部隊と行動組織の反戦青年委の中核への登場、斗いの個々の局面に於る労働者と学生の突出と斗争へゲモニーの相互移行と相乘的発展の可能性（街頭と生産点、機動性と組織性、戰術と組織とを結合させた）と同時的挫折 e.t.c. が特徴的であつた。